

六 「でも御坐らうが此所は一番、拙者に面じて御ゆるしなされ。
 五 「ゆるし難う奴なれど、相役の御言葉ゆる、それでは此儘放してやる、
 以後は決して。」

ト平兵衛を突飛し。

五 「相成らぬぞ。」

平 「すりや御助け被下りましたか、へ〜難有ふ御坐います。」

ト一散に逃げて下手へ這入る。迹見送りて皆々顔を見合せ。

皆々 「は〜、〜、〜。」

五 「なぞどうま〜、計略にて。」

一 「商人奴を追ばらひ。」

六 「酒と肴を分捕とは。」

二 「近來まれなる大勝利。」

五 「どりやこれから飲直さうか。」

皆々 「それが好い〜。」

ト皆々捨臺詞にて薙を敷直し、酒盛を始め。此所へ陣門より前幕
 の大室小彌太、落合三郎、いづれも甲冑附太刀にて出来る。皆々吃
 驚して此處に平伏する。

大 「やア不届なる軍卒共、陣前にて取みだし、酒盛するさへゆるしがた
 きに。」

落 「小商人をあざむきて、代物も遣はさず、強奪するとは悪ツく奴。」

大 「只今知らせる者ありて、物取めきたる其方等の所業。」

落 「逐一承知致して居るぞ。」

大 「かりそめにも源氏の軍卒、左様な事を致しては。」

落 「吾君の御名折のみか、木曾侍士の耻辱なり。」

大 「掟の通り引縛つて。」

落 「刑罰屹度申渡すぞ。」

一 『重々恐れ。』
皆々 『入りました。』

ト此所へ最前の平兵衛下手より出て。

平 『今度の御役人は本物と見える。』

大 『さあきりく〜と。』

大落 『立居らぬか。』

皆々 『へえ引。』

恐入る。兩人は引立てやうとする。平兵衛好い心持だと言ふ思入。此模様合方にて、道具廻はる。

○同 陣中の場

本舞臺一面の平舞臺。正面源氏の紋附きたる陣幕。上下杉の立木、これに同じく陣幕を張りて見切り、都て篠原宿源氏陣中の体。真中少し上に

寄りて、前幕の義仲、甲冑好みの拵へにて床几に腰を掛けて居る。太刀持一人附添ふ。後に甲冑の武士大勢、上の方に前幕の今井四郎兼平、根井大彌太行親、甲冑好みの拵へにて住ふ。下の方原藏人行家、甲冑好みの拵へにて床几に腰を掛けて居る。これにつゞきて下手に樋口次郎兼光、楯六郎親忠、同じ拵へにて住ふ。此模様山おろしにて道具留る。

ト詔への合方に成り。

今 『吾君一度信濃路に、義兵を起し給ひてより、城資永を滅亡させ。』

樋 『北國諸所に轉戦なし、平家の大軍引受けて、勝負互ひに定めなく。』

根 『味方に死傷も多かりしが、俱理伽羅谷の一戦にて、例しまれなる勝利を得。』

楯 『此所まで押寄せ進めしは、偏に吾君御武運の、秀れて強き兆しなり。』

今 『此期に乗じて都に入り、少も早く平家の族を。』

樋 『追はらひたき。』
四人 『物で御座る。』

行 『これと申すも義仲殿が、武勇に長しゆゑなれど、又方々の掛引も、之を助けて今度の大勝、殊には火牛の計略は、彼の天神の祭事より、思付かれしものなるか、唐土のためし日の本に、眼前見たる勇まし

義 『行家感入致して御座る。』
『平家の族の腑甲斐なさ、勝利を得ても何となく、腕に應へのあらざるは、木曾に鍊へし吾力を、未だ半分も出さぬゆゑか、之から都へ押寄せたらば、少しは興ある合戦もあるべし。強き敵にも出合ふべし。兎は申せども兼遠が、上洛なして此方に、二心なきを言開き、誓文書きて油断させしは、全く味方に要意の猶豫を、充分得させし賜物なり、夫なくば最初の戦に、敗北なして今頃は、滅亡なせしや知る可らざる。』

行 『源氏を守る八幡宮、神の助けも有る事ながら。』
今 『重能實盛兼遠の、此三人は吾恩人、常に忘れは致さぬぞ。』
『難有ら其御言葉、父が聴きなば如何ばかり、喜びまするや知れ申さぬ。』

樋 『尙此上に我々も、忠義を勵み。』
皆 『申すで御座らう。』

今 『扱て方々が得られたる敵の首級の賞檢は、大方に濟みたるが。』
今 『未だ濟まざるは誰々にや。』
今 『見受ませぬは海野彌四郎行弘。』
今 『入善小太郎安家。』
今 『南保次郎家隆。』
今 『手塚太郎光盛。』
今 『これだけに御坐りまする。』

今 義
「然らば早く呼出せ。」
「ハッ。」

ト立上らうとする。此時向ふにて。

「おいや、御召に及ばぬ、海野彌四郎行弘。」

「入善小太郎安家。」

「南保次郎家隆。」

「手塚太郎光盛。」

「只今それへ。」

四人 海
「參上致さん。」

ト誂への鳴物にて四人、いづれも甲冑好みの拵へ、後より雑兵三人各々首桶を持ちて、向ふより出で、直ぐ本舞臺に掛り、四人下手に居ならぶ。雑兵三人首桶を義仲の前に置きて下る。
「士卒の中に手負ありて。」

入 南
「彼此手間取り實檢に。」

「遅延致して申譯なし。」

「それと申すも是と言ひて、實檢願ふ首級もなく。」

「差ひかへて居りましたが。」

「兎に角御前に伺候せんと。」

「打揃うて。」

四人 義
「參りました。」

「それゆゑ遅參致せしとな、何は然れ見分に及ばむ。」

ト床の上るりに成り。

上
朝日に照らし義仲が。一々首を實檢なし。

ト義仲軍扇を開きて身構へる。兼平進出て首桶の蓋を取る。義仲よろしく首實檢ありて。

義
「最初に置きたる首級こそ、まざれも無き權頭、範高と見たが僻目

か、これは誰が討取りしぞ。

海 「御尋ねに預かりて、面目次第も御座りませぬ。討取りましたは拙者なれど、誠は死首に御座りまする。

義 「なに死首とな。

海 「如何にも。

行 「行弘には何故に、死首を。

皆々 「取られしぞ。

上 「問詰められて行弘は。ハツとばかりに平伏なし。

海 ト行弘恥入りたる仕打ありて。

「何をか隠し申すべき、敵の北ぐるを追掛けて、一矢射込めば過たず、其所に例れし一人の大將、出来たりと我から賞め、直様首を搔かんものと、駈寄る際に件の敵將、かなはじとや悟りけん、自ら喉を貫きて、最期を遂げたる其後へ、駈付けたれど甲斐もなし。あまりの無念

に責めてもど、則ち死首取りたる次第、實檢願ふも面目なれど、名ある敵ぞと存せしゆゑ、厚顔にも差出したり。ゆめ功名を貪らん、慾心にては候はず。

上 「と言上すれば、大將うなづき。

義 「好くぞ實を申したり、武士は斯くこそ有りたけれ、好しや死首なればとて、最初に一矢射込みしからは、其功更にかはる事なし。追つて賞美遣はするぞ。

海 「すりや御呵りもなく其上に、御賞美を被下るとな。ハツ、難有う御座りまする。

義 「して其次ぎなる若武者の、首級は誰が討取しぞ。

上 「問へと答へは荒武者の。名乗も出でず。默然たり。

ト皆々無言にて控へる。

義 「不思議な事もある事かな。討取りたる人なくて、首のみ此所へ來り

しとは、仔細ぞわらむ。

上 眉ひそめ。口を結びて居たりける。入善小太郎進出で。

ト義仲不審の仕打、入善小太郎進出で。

入 其首級こそ、南保次郎家隆が取りたる物。

上 言葉半分家隆が。驚き留め。

ト南保家隆、小太郎を留め。

南 「わいや、其首を討取りしは、拙者ならで、入善小太郎安家に御座り
まする。

入 「いや決して左にあらず。全く以て家隆が、手柄に相違御座りませぬ。

入 南 「いや和殿の働きなり。

「いやく貴殿の功名なり。

上 互ひに譲る功名を。義仲少時と押留め。

義 「これにも仔細のある事ならん、先づ始終を物語れよ。其上にて判ず

べきぞ。

入 「はまッ仰せに従ひ申上げん。拙者一騎成合の、北の渚を行く折柄、

出逢ひたるは一人の武者し。

ト詔への合方に成り。

入 「練色の魚綾の直垂に、黒糸威の甲を着し、葦毛の馬に跨りしが、名

乗るを聴けば高橋判官、長綱と言ふ侍大將。シヤ好き敵なりと此方

も名乗り、初めは互ひに切結びしが、馬より落ちて組討に、残念なが

ら下と成り、既に危き其處へ。

南 「折好く拙者行合せ、直ちに馬より飛下りて、上なる高橋引退けんと、

鎧を持ちて力を入れしが、兜は取れても動かぬに、之までなりと一刀

引抜き、鎧の草摺跳のけて、柄も通れと刺したるに。

入 「漸く我も自由を得て、起揚り様喉元を、一太刀深く貫きたるに、左

しもの敵も弱りけん、終に落命致したり。これと申すも南保殿の、偏に助力ありしゆゑ。

南 「いや、和殿が最初より、ヒシと組付居られしゆゑ、何なく上より刺されしなり。

入 「先は大器。

義 「かくの通り。

「それで様子が分つたり。兩人共に目ざましき、働きたる其上に、手柄を互ひに譲るとは、海野と言ひ、其方等と言ひ、頼母しく、褒美は兩人同様なるぞ。

入 「思ひがけなき御褒美に。

南 「痛み入つて。

義 「御坐りまする。

「扱て最後なる首級の主は、手塚太郎の他にはあるまじ、何者の首なるぞ。

上 星を指されて光盛は。前に進みて両手を突き。

手 手塚光盛進出で。

「如何にも御賢察の通り、光盛が討取りましたれど、其者の何人なるか、一向心當りが御坐りませぬ。

「すりや名乗を聴かざりしとな。誰そ此中に見知りては居らぬか、識りたる者は居らざるか。

上 言へば行家初めとして。誰知る者も嵐吹く。峯の松のみ颯々たり。

ト皆々首を見れども、誰とも知れぬ思入。

「見おぼへのある顔なれど、急には思出されず。ンテ此武者を其方が、討取りたりしは如何にしてか、疾く語つて聴かすべし。

手 「左様御座れば其場の様子。

上 物語らむと座を正し。

手 ト床の合方に成りて。

「拙者君の御手に屬し、諸所の合戦にのぞみしかど、これぞと申す功名を、未だ致さぬこそ口惜しけれ。今日ぞ不覺を取かへし、天晴好き敵討取らんと、駒を早めて行先きは。

上 篠原つゞきの小松原。彼方此方と馳めぐり。

手

「少時尋ねて居たりしかど、逃足立ちたる平家の雑兵、一人もこれぞと思ふは無く、皆散々に走行く、中に一人踏留り、合手欲し氣に見え

しかば、勇進んで前に立ち、先づ此方より名乗りかけ。

手

上 見れば怪しき武者化粧の何者なるか名乗もせず。

手

「只からくと打笑ひて、汝は誠に仕合者なり。今我姓名明かさずとも、知る人ぞ能く知り給はん。吾首取つて木曾殿に、見参に入れる時は、屹度重賞にあづかるべし。ゆめ疑うて淵にな捨てぞ。イザ早や勝負と身掛へしは、扱ても不思議と其場にも、尙好く向ふを見定れば。

上 先づ目につくは其いでたち。

手

「赤地の錦の直垂着たるは、大將ならんと思はるれど、續く士卒のあらぬを見れば、侍かとも思はれて。

手

上 都の者に似たれども。

手

「聲は正しく坂東訛り。

手

上 額に皺の浪打てぞ。

手

「鬢鬚共に髪黒く、ゑたいの知れぬ癖者ながら、後には知れんと引組んで、ツヒに首をば搔きたる次第。

手

上 かくの通りと落ちもなく。語り終りて軍扇に。少時風をぞ入れに

手

ける。

手

ト光盛物語りを止める。

手

「扱てはもしや此首は、實盛にては有らざるか。去るにても訝かしきは木曾にて逢ひたる其時には、雪をあざむく白髪なりしが。

行

ト不審の思入。

「白髪にてある時は、實盛なるを人知れば、誰も討たじと思ひしゆゑ、黒く染めしにはあらざるか。」

今

「平家に忠義を立てつらぬき、思出の合戦に、赤地錦の直垂着して。」

若かへりたる心より、斯く致せしや知る可らず。

若

「いづれに致せ其首を。」

南

「水にて洗ひ落しなば。」

入

「實否が直ちに知れ申さん。」

海

「其儀尤も然るべし。」

根

「誰そある水を汲取りて。」

橋

「急いでこれへ持つて參れ。」

若

「やア、疾くこれへ持つて參れ。」

ト急込んで言ふ。

侍

「はあッ。」

ト軍卒二人水桶に杓を持つて出来り、好き處に置く。

「それ、光盛、其方疾く洗うて見よ。」

「はッ。」

ト光盛立上り、ズカ〜と進んで、實盛の首を手に取り下る、侍水

を掛ける。ドロ〜にて實盛の首仕掛にて白髪に成る。皆々見て

驚き、顔を見合せる。

「や〜。」

「思ひし如く實盛なりしか。」

ト急に床几をはなれて立上る、光盛急ぎて首をさへげて義仲の前に

持つて行く、義仲取上げて。

「死なしたり。」

トどかツと床几に腰を据える。光盛座にかへる。本釣鐘を打込む。

侍

光

皆

義

義

「いつぞや木曾にて相見し時は、此首好く物言ひて、吾二歳の其昔、共に木曾路の雪中に、難儀なせしをいと委しく、我に語りて聴かせしが。」

義

ト愁ひの思入、詭への合方に成り。

「今は此口又開かず。一たび眼を閉じては、我が今日のいでたちも、最早や見る事かなはぬか。其方が情けに助けられ、木曾山中に育ちたる、駒王丸は成人して、今は源氏の大将たり。成らば一度眼を開けよ。吾勇ましさを見て呉れよ。俱理伽羅谷の勝利と成りしは、生前にて知りつらん。せめては夫にて心も遣れど、其勝利こそ其方の、最期を急がしたるかと思へば、吾胸たしかに貫かれて、矢根を留めたる如くなるぞ。平家の爲めに討死したる、其義心こそ實盛の、實盛たりし處かや。我をわざと守護なして、木曾まで送りて來りしも、其方が義心のなす處か。其後幾度使者を立て、此方に附けよと呼びたれど、ツヒ

とるまづ

に動かす來ざりしも、義心のなせる處なるか。使者を遣りしは何んの爲めぞ、厚き恩義を報せん爲め、それが生前には志を遂げず、死後の菩提を吊へどや、吾手に漸く首の入りしも、深き縁のある故なり。兼平よ、又いつもの諫言に、輕々しとて呵るなよ。涙脆しとて行家殿。笑ひ給ふな、笑はるゝな。

上 泣かじとしても留めがたき。涙にのこる墨の色。あらひ落して頬に當て。人目かまはぬ大将の。悲嘆に連れて人々も。

ト首を抱きて義仲愁ひの仕打、皆々下を向きていつれも悲しき思入。上 野陣の草葉に。置きあまる。露に甲を。此模様よろしく時の鐘三重にて、幕

○三幕目 西洞院客殿の場

本舞臺三間の間。中足の二重。三方折廻はして、檜皮葺の庇、椽側高欄

付き。真中に高欄付きの階段。正面革紐の引手附きたる好みの襖。上方一間奥へ下げて續き屋体、同じく庇椽側高欄付き。御簾を下げ。下手三尺の廊下口。上下網代垣にて見切り、都て西洞院客殿の体。爰に前幕の義仲、立茶筌鬘、胴服小袴、好みの拵へにて上手に住ひ、太刀を抜きて揮ッて居る。真中に白井法橋幸明。坊主鬘、法衣好みの拵へ。慈雲坊寛覺、同じ拵へにて、兩人首引をして居る。下手に前幕の兼平、立茶筌鬘、素袍好みの拵へにて、弓の索引をして居る。下手椽側の高欄に依りかゝりて太夫坊覺明、坊主鬘、法衣、好みの拵へ。鬘を抜き居る。此見得合方にて幕明く。

ト幸明寛覺、首引の可笑味ありて、ト、寛覺負ける。

「勝つたぞ、いづれも見られよ、幸明が勝申した。」

「負けは負けても遊戯ゆゑ、少しも耻辱には相成らぬわ。」

「其方が勝てば威張散らし、負ければいつでも逃口上、さて〜里の

童のやうに、たわいの無い坊主かな。

「里の童とは何事ぞ、我が童なら和僧こそ、生れて間もない赤子でも

あらうか。

「其赤子に負ける奴は、よく〜の弱武者ぢや。」

「弱武者とは誰が言ふた。」

「我言ふた。」

「八幡ゆるさぬ、瀬多橋の手並知らぬと見える。」

「何んの後馳に切入りながら、手並も何もあるものか。」

「知らぬなら見せてやらふ。」

「望む處ぢや、早く見せし。」

「好しあらためて最一度首引き。」

「何んでも好い、心得た。」

ト誂への鳴物にて、兩人首引を初める。皆々見物する。ト、義仲太

幸 寛 幸 寛 幸 寛 幸 寛 幸 寛 幸 寛 幸

刀にて首引の綱を真中より切る。兩人兩方に引覆へる。皆をドツと笑ふ。

義

「北國より押寄せて、何んの苦もなく都に入りしが、敵となすべき平家の奴輩、一人も残らず落延びたれば、矢を放つべき的もなく、退屈のつれづれに、太刀打振れど甲斐もなし、何か興ある事はと存せしに、只今の二人のあらしひ、思はず知らず笑ふたわえ。」

寛

「腕押首引足角力、せめても之にて力をためるも、合戦に慣れたる我々には。」

今

「一日たりとも安閑と、家の中にて暮すのは、何としても氣づまりゆゑ。」

幸

「少しも早く追討の、院宣受けて西國へ。」

寛

「下りたいもので御坐りまする。」

義

「大軍引連れ上洛なし、其時參内なしたるのみ、此西洞院を、義仲の

今

「如何にも君のおほせの如く、斯く何事も悠長なるは、人心衰へし証據にて、天下を亂す皆基。」

寛

「戦ひもせず逃走れる、平家の族が好き手本、これに代らん源氏方は、何處までも勇氣を示し、萬の弊害のぞかずば、同じ轍を踏み申さん。」

義

「我又それを思はぬにはあらず、新なる代をつくらんには、逆らふ者もあるべけれど、無二無三に押通して、我日の本の武の光りを、唐土までも輝かさんには、一通りではかなはぬ事。」

今

「それを思へば此方より、押して參内あらむ事。」

寛

「何んの憂慮や候べき。」

兼義

「然らば直様參ると致さう。兼平、要意を申付よ。」

「はッ申付けるで御座りませう。ト立上ふとする。此時、前幕の根井大彌太、烏帽子素袍にて廊下口より出來り。」

「はッ申上げます。」

「何事なるぞ。」

義根

「只今猫とやらむ言へる人の、宣ふ事の候とて、車寄に待れて候。」

義根

「なに猫と言へる人とは心得ず。猫か人かいつれにや、猫ならば我に遇はんとにはあらざるべし。鼠を取りに參つたのであらう。」

義根

「いや矢張人にて御座りまする。」

義根

「人ならばいよく訝し、何故猫殿と申すにや。それを聽いて參るべし。」

義根

「はッ。」

今

義

今

覺

幸

寬

覺

幸

三人

今

義

ト根井引返して這入る。

「猫とはかへすくも不思議なる名なり。」

「何かの聴き違へにて御座りませう。」

「何は然れ客人の、入來とあるからは。」

「君の御相手これまでなり、遠慮致して我々は。」

「御次ぎへ下ると致さうか。」

「御用の節はいつにても。」

「參りまするで。」

「御座りませう。」

ト三人襖を明けて這入る。

「兼平には此處に居て、猫の正體見るが好いぞ。」

「興ある事に御座りまするな。」

ト廊下口より以前の根井出で。

根 義 根

「わかりまして御座りまする。」

「何んどわかりしぞ。」

「まつたく猫には候はず、猫間殿と言ふ公卿にして、院の御所よりの内命を奉じ、是非に面會ありたしとの事。」

「それにて思出したたり、猫間ならば中納言、光隆卿にはあらざるか。」

「何んでも其様な名で御座りました。」

「好しく猫にもあれ猫間にもあれ、早速此方へ御通し申せ。」

「畏りました。」

ト又引かへして這入る。

「院の御所よりの御内意を奉じて、参りたる人とならば、此儘でもあれはまじ、衣服を正して對面致さん。」

「それがよろしく御りませう。」

「猫間々々。」

今 義 今

根

猫

ト口につぶやきながら、唄に成り、上手廊下づたひに義仲這入る。

兼平従うて這入る。管絃の合方にて、根井先きに、廊下口より猫間

中納言光隆、冠、装束、好みの拵へにて出来る。童一人白木の臺に

立鳥帽子狩衣を載せるたを持來り、猫間の前に置きて這入る。

「これにて御待ち被下たし、只今義仲對面を得申すべし。」

ト根井上手に這入る猫間四邊を見廻はして。

「清淨なりし西の洞院も、僅か五六日立つか立たぬに、斯くも汚くな

るものか、柱に刀の切瑕あり、實に山國の人々は、何事も荒々しく、

取次の侍士も、見るから面付き恐ろしくて、山賊の棲家に來たも同然、

こりや怒りに觸れては一命を、取られるやも計られず。」

ト臆病の思入ある。上手屋体の内にて。

「猫殿が入來ありしと、只今それへ参るで御座らう。」

ト直垂好みの拵へ鳥帽子を冠りながら出來り、好き處に住ふ今井根

根 義 根

「わかりまして御座りまする。」
「何んどわかりしぞ。」

「まつたく猫には候はず、猫間殿と言ふ公卿にして、院の御所よりの内命を奉じ、是非に面會ありたしとの事。」

「それにて思出したり、猫間ならば中納言、光隆卿にはあらざるか。」

「何んでも其様な名で御座りました。」

「好しく猫にもあれ猫間にもあれ、早速此方へ御通し申せ。」

「畏りました。」

ト又引かへして這入る。

義 今

「院の御所よりの御内意を奉じて、参りたる人とならば、此儘でもあれはまじ、衣服を正して對面致さん。」

「それがよろしく御りませう。」

「猫間々々。」

根 猫

ト口につぶやきながら、唄に成り、上手廊下づたひに義仲這入る。兼平従うて這入る。管絃の合方にて、根井先きに、廊下口より猫間中納言光隆、冠、装束、好みの拵へにて出来る。童一人白木の臺に立鳥帽子狩衣を載せるたを持來り、猫間の前に置きて這入る。

「これにて御待ち被下たし、只今義仲對面を得申すべし。」

ト根井上手に這入る猫間四邊を見廻はして。

「清淨なりし西の洞院も、僅か五六日立つか立たぬに、斯くも汚くなるものか、柱に刀の切瑕あり、實に山國の人々は、何事も荒々しく、取次の侍士も、見るから面付き恐ろしくて、山賊の棲家に來たも同然、こりや怒りに觸れては一命を、取られるやも計られず。」

ト臆病の思入ある。上手屋体の内にて。

義

「猫殿が入來ありしと、只今それへ参るで御座ろう。」
ト直垂好みの拵へ鳥帽子を冠りながら出來り、好き處に住ふ今井根

義 猫 義 猫

井添附ひ、後に住ふ。

「猫にはあらぬ猫間殿とは、御身にて候や。」

「如何にも猫間中納言光隆と申すなり。」

「拙者こそ源義仲。」

「すりや和殿が義仲公にて御座ありしか、之は初めて御意得まする。帯刀先生義賢殿の一子にておはする、木曾義仲公とは御身にや、天下に勇名を轟かしたる、源氏の大将とは御身にや。北國にての御奮戦は遠き都まで傳はりました。イヤいづれの席でも御噂ばかり。其義仲公に斯く近きて、對談を得るとは、今日は如何なる吉日ぞ。子々孫々未代までも、家の榮譽に御座りまする。此後とても御心やすく、偏に厩ひ上げまする。」

義

「トびよこ〜頭を下げる、義仲苦々しき思入ありて、だしぬけに。猫殿。」

義 猫 義 猫 義

ト大きく云ふ。猫間吃驚する。

「猫間とは世にもめづらしき御名かな、其聲猫に似たればとて、夫れゆえに呼ばるゝにや。」

「イヤ〜決して左様には候はず。七條壬生の邊をば、北猫間、南猫間、と申す。手前は北猫間に住居致せば、それ故猫間と申しまする。」

「左様であつたか、夫れは扱て早速伺ひたきは、院の御所より御内意を受けて、御入來の趣き。其儀は如何なる次第にや。」

「それは餘儀にても候はず。今日あらためて平家追討の院宣を、源氏方に賜はるべく、まつた御身を左馬頭に任せらるべき間、早刻參内これあるべしとの、内命を受けて参りたり。」

「すりや平家追討の院宣を、下賜はるとな。忝けなし〜、これより直様。」

ト立上らうとする。

猫

「しばらく御待ち被下たし、就きては参内の儀式として、様々作法禮法も御座あり、又装束も常のとは異なりまします。依て禮式の打合せは、手前より御教授致すべく、又装束の儀は戰場より直ちに上洛ありし事故、別に要意のなからむと御察しありて、御所より御廻しに御座りまする。これなるが即ち狩衣」

ト白木の臺を前に出し。

義 猫

「又表には車も参りて居り候えば、それにて参内めさるべし。」「何から何まで御心添、恐入る。然らば先づ装束より、此場で着け申すべし。」

猫

ト誂への鳴物にて、義仲狩衣立烏帽子を着ける。皆々手傳ふ。「斯く狩衣に立烏帽子、装束せられた處を見れば、鎧兜の扮装より、又格別の立派々々。御所にも稀れなる美男子、さだめて御簾越に女房達が、視見致す事御座らう。さア〜此上は参内の式作法を、御教

義 義

へ申さん、先づ先づ此方の足からスラリ、それ此方からスラリ、いや笏は斯う御持ちなされて、サア此方からスラリ〜。ト猫間乗地に成りて足に手を掛ける。義仲我慢の出来ぬ思入にて、猫間を突退ける。猫間尻持をつきてふるふる震へて居る。「君をうやまふ真心さへあらば、何條虚禮になじまんや、此儘参内。ト笏を持直すを道具替りのしらせ。」「致すであらう。ト此模様よろしく、合方にて道具廻る。」

○同 院御所對屋の場

本舞臺一面の平舞臺。白木造りの家體襷、欄間、翠簾を下し、中より黒塗の格子。上手一間の間妻戸の薄縁を敷き、都べて院の御所對の屋体に。茲に公卿イ、ロ、ハ、ニ、ホ、へ冠装束にて居ならぶ。此見得管絃に

て道具留る。

「何んど方々には、只今参内致したる義仲の風體を、能く御覽われしか。

「見ましたともく、いや早や、田舎武士の品格賤しく、甲冑ならば似合ひもすれ。

「狼に衣を着せ、猿に冠を頂かせたらば、丁度彼の様にも候はんか。

「下世話に申す牛飼にも、衣裳どやら申せども、狩衣着ても武骨は隠せず。

「さよとくとして四邊を見廻はし、足元さへもおぼつかなく。

「あれで御前へ出でたりとは、夫れこそ大膽不敵のふるまひ。

「禮儀作法も心得ねば、爲す事一々野卑にして、見苦しい事に候はずや。

「殊に廣々として清らかなる、御所に参りし事なれば。

「見る物残らず珍らしさか。

「大聲あげて聴く様は。

「冷汗生じて氣毒千萬。

「あみれた物に御座りまする。

「好しや軍に強しとて。

「御所に参内なしたる上は。

「水をはなれし井中の鱒。

「島から出た土龍。

「何處やら勝手が違ふと見え。

「少しも威勢が。

「御座りませぬな。

ト此所へ、犬室少納言黒淵、冠裝束にて廊下口より出來り。

犬 「方々には義仲の、噂をして御座るのか。彼が途中の失體を、誰よりか御聽きなされたか。

イ 「一向に。

皆々 「存じませぬ。

犬 「然らば御話致さうが、頤を落さぬやうに、先づ冠の紐でも締直して、それから御聽きなさるがよいて。

イ 「此通り。

皆々 「べめました。

犬 「先づかやうで御座る。

ト合方に成り。

犬 「今日參内の道中を、初めて車に乗りたるものか、勝手が少しも分らぬ爲め、イヤハヤ笑止な事ばかり、左右の物見前後の簾、残らず跳上げましたゆゑ、見かねて牛飼の小童が、斯くはせぬものにて候と、申

せしかせ、強情にも従はず、車の内に引籠りて、居ては、何となく鬱陶し、明通してこそ道々も見ゆれど、は、は、は。申したり答へたり。

イ 「イヤこれは又興さめや。

皆々 「は、は、は。

犬 「小童は悪戯者、これより牛を大急ぎに急がして追立つれば、手形に繩るを知らざるゆゑ、後様にひっくりかへりて、此様に装束を蝙蝠の如くひろげた儘、足をドタバタ動かしながら、待てよ〜と呼はる様何と笑止千萬ならずや。

皆々 「あは、は、は。

犬 「されど、彼も例の情強、御所まで寝た儘にて乗通し、車の上の寝心は、又格別と申したとやら。

イ 「いやはやこれも興さめや。

皆々 「あは、は、は。

犬

「扱て御所に着きて、車寄にて下りる時、後より下りやうと致せしゆゑ、車は後より乗りて前に下りるものにて候と教へしかど、車とて素通りはすべからずと言捨て、矢張後から降りました。」

皆々

「は、は、は、は、は、は。」

犬

「此様子ゆゑ只今も、彼方にて大笑ひ、参内なして御前の失策、さぞ多い事と存じられます。」

イ

「それから見ると平家の人々は。」

ロ

「いづれも優美に。」

皆々

「御座りましたなア。」

トバタ／＼にて上手の廊下口より、猿屋少納言赤運出來り。

犬

「それ／＼木曾の怪物が、程なく下つて参りますぞ。」

イ

「葵祭の見物より、又一段の賑はしさ。」

「女房達にも翠簾越しに、見らるゝやうに知らせ申さん。」

義

ト下手へ這入る。管絃に成り、上手廊下口より以前の猫間中納言案内して、以前の木曾義仲出來る。これを見て皆々くす／＼と笑ふ。笑ひ切れぬを袖にて隠す。

「扱て／＼不思議なる大戸や脊戸や、中戸にも繪を畫きたり、下内にも唐紙押ししたり、何とて木地を其儘に見せぬにや。裝飾の多きは都の定則、見かけは如何でも好きものを、柱も丈夫板の間も堅固、殊に間取は廣き上に廣く、天井は高き上に高く、地震大風來るとも、微動ともせぬやう造らば、何の役にも立ち申さぬ。」

猫

ト言ふ。皆々又顔を袖にて隠す。

「何は然れ異變もなく、参内を濟まし給ひ、喜ばしい事に御座りますな。併しながら御前を退出の刻、裾踏付けて轉がられし時は、冷汗背を濕はしましたぞ。」

義

「なに彼しきに、武士が馬より落ちなば耻辱ともなるべけれ、狩衣は

着付け申さね、立鳥帽子も頭に合はず、最はや取りてもよろしからむ。

義

ト鳥帽子を取つて捨てる。皆々顔見合はせて笑ふ。

「此刺貫は歩きにくし、それ故最前のやうに轉びもする、これも脱ぎて参らうか。」

ト刺貫を脱がんとする。

皆々

「は、は、は。」

猫

「猫殿、なにを其様な顔して立て給ふぞ。」

「さりどて未だ御所内なるに、あまりと言へば禮に欠けたり、車寄まで御忍びなされ。」

ト留める。

義

「車寄とは車の着きたる處か、彼方まで歩く内には、又轉ぶやも存じられねば。」

皆々

「は、は、は。」

義

「最前より黙つて居れば、好い氣に成つて増長し、一言毎に何故笑はる。」

トキツト言ふ。

皆々

「あは、あは、あは。」

義

「拙者の舉動が興あるにや、言葉付きが可笑いのか、舉動は軍人の仕打にして、言葉は國の訛なり、何の可笑しき事あらむや。」

猫

「いや、決して御身の事を笑ひたるには候はず、何か他の事に御坐りませう。」

義

「扱て、都には言葉にまで飾あり。吾身の上を笑ふたのか、人の事を笑ふたのか、得知らぬ拙者でもない、御身でもあるまい。西を東、鹿を馬とは、見下げ果てたる根性かな。斯かる人の面皮撈きて、眞面目を見たいものぢや。我は上部こそ賤しけれ、心は清く汚濁なし。神

神も照覽あれ。

ト肌を開きて胸を打たて見せる。

皆々「あは、あは、あは。」

「可笑しいか、我言ひたるが可笑しいか、我爲したるが可笑しいか、人の心の上部に留り、見得第一に流れたる、大宮人の眼と耳には、可笑かるべしく、いで可笑からぬやうに、根性を入交へて進ずべし。」

ト意氣成り猫間を突飛す。皆々驚きて逃出す。追掛ける拍子に正面の翠簾落ちると、中より女房女の童大勢逃出す。義仲一人の公卿を捕へ手を捻上げ、一人を足にて踏へながら、キツト見得。

「それ見よ、人にして蜘蛛の子の如く、右往左往に逃出して、誰一人狼狽者を、捕へんとする者無きにわらずや、萬一悪漢御所内に忍入り、亂暴なしたる其時に、君を守護する者誰かある、男にして女の如く、

女と言はれて喜ぶ族に、眞の男子の性根が知れうぞ。好き衣着て好く遊ぶ、蝶同然の都人は、花に月に歌を詠み、詩を作るこそ巧みならめ、歌舞管絃を事とする者、如何でか勇士の心を知らん、揃ひもそろひし無用の長袖、短かく切つて。

ト一人を投飛ばすを道具替りの知らせ。

「進上致さん。」

トキツト成る。此模様早舞にて道具廻はる。

○同 釣殿の場

本舞臺三間の間、高足の二重。椽の下見透し、柱に人の隠れる仕掛。三方折廻して檜皮葺の廂。三方一面に黒塗の格子を釣上げ、翠簾を下げてある。縁側白木の高欄付き。下の方奥へ下げて一間、高欄付きの續き屋體、廊下の模様。白木の扉にて見切り。上方西の對屋を見たる書割、

平舞臺前の方波布を布き、切穴あり、泉水の模様。後の方庭石立木などよろしく、都て釣殿の体、風の音にて道具留る。

トバタ〜に成り、公卿衆、女房達、大勢、下手の扉より逃げながら出来り、うろたへたる仕打いろ〜可笑味ありて、ト、簾の中に隠れる。以前の猿屋椽の下に下りて柱の蔭に隠れる。詭への鳴物にて以前の義仲、以前の犬室と立廻りながら下手扉より出で、直ぐ上手の庭に投げる。見事に轉る。本釣鐘を打込み、キツと成る。笛入りの方方に成りて。

義

「我二歳にして父を失ひ、實盛の情にて、木曾の山間に人と爲り、二十餘年の其間、只一心に源家の再興、そのみ胸に刻付け、兵法武術に一日も、怠る事なく勉めしかば、如何でか禮儀を知るべきぞ。知らざる者はそれまでぞと、我を嘲り笑はずば、我も亦斯く狼籍して、恐多くも御所内を、騒がしはせざるもの、我と招きし殿上人、養ひがた

きは小人よな。

ト足踏をする。此拍子にて下の柱に縋りたる猿屋泉水の切穴へ落ちる後の簾も一所に落ちる。皆々驚きてうろたへながら逃げて這入る。迹松殿の息女山吹姫、垂髪髻、小うち衣、緋の袴の拵へ。逃げおくれて震へて居る。

「女子には更に構ひなし、早や〜此所を立去られよ。

ト言ふ。山吹姫矢張震へて居る。

「早く此所を立去られよ。

ト言ふ。矢張顔をかくして震へて居る。

「扱ては最前の騒動にて、何處ぞ怪我にても致されしか。

ト言ひながら其手を取る。山吹姫最前より恐ろしさに、氣も遠く成りて居る處へ、むづと義仲に手を取られ、ハット驚きたる途端に氣絶する。義仲驚きて介抱せんと抱上げ、不圖其顔の美しさに氣が付

義 美 義

義

「こりや何と致されしぞ、急病にてもおこりにや。」

ト言ひながら、うつとりと成り、思はず知らず、手元がゆるむ。山吹姫がツくりと成る。

義

「心をたしかに相持れよ。」

ト笙箏篳の入りたる音楽の合方に成り、尙もちつと抱めて居る。泉水に落ちたる猿屋、切穴より、這上り高欄に取付きて上に登りかける。此體に驚き、又降りて、冠に水を酌、そつと捧げる。義仲は姫の方を見詰めて此方に眼も呉れず、知らずく、受取りて、それを姫の口に含ませる、猿屋は茫然として見て居る。此模様虫の音、知らせ無しに、幕。

○四幕目 山吹姫居間の場

本舞臺三間の間、中足の二重、折廻して檜皮葺の庇本椽付き、真中階段あり。上に詔への書院床。二方翠簾を下げ。上方奥へ下げて一間の續き屋體、廊下の模様。妻戸にて見切り。下の方枝折戸を真向きに見せ、是より舞臺前の斜に低き透垣、後に庭を見たる書割。茲に侍女、黄菊、白萩、紅梅、青葉、下げ髪鬘、古代の衣裳にて居並ぶ。此見得合方にて幕明く。

黄 「なんと皆さん、困つた事では御坐んせぬか。」

紅 「此間より姫君の御病氣に、あらゆる神々へ御願を掛け。」

白 「少しも早く御本腹なされますやうに。」

黄 「只管祈る甲斐もなく。」

紅 「日ましにおすぐれなされぬとは。」

皆々 「此様に心配な事は。」

「御坐んせぬなア。」

黄 『それと申すも院の御所にて、いつぞや木曾の義仲が、狼籍を致しました時に。

紅 『釣殿にての御驚き、正氣を御失ひなされたのが、御わづらひの起因にて。

白 『胸の動氣が高く打ち、御寝みなされておいでありても。

青 『夢にたびく、魔はれ給ひ、ソレ義仲が来たくと。

黄 『いまだにおほせなさるとは、よくく彼の時の恐ろしさが。

紅 『御胸に染みためものと存じられます。

白 『それに此頃承まはれば、彼の山猿の義仲が、是非に姫君を申受けん

す。

青 『毎日のやうに使者にての催促、こわらしい坊様が参りまするとや

紅 『それゆゑ益々御病氣が、高まるものと存じられます。

白 『妾じやとて木曾武士の、義仲づれに連添ふのは。

青 『厭な事で御坐んすなア。

紅 『あれく又もや姫君が、魔はれ給ふ彼の御聲。

黄 『御起し申うさでは、御坐んせぬか。

ト皆々立上りて翠簾を卷上げる。

正面一間白の土壁。此所に黒棚を置き。二間の間几帳を下てある。此前に

黄 『もし姫君。

皆々 『姫君。

ト几帳の内にて。

山 『好ら覺して呉れやつた。又もや夢に魔れて居たわいの。

黄 『其様にたれこめて、一日御やみすあそばしては、御身體の御爲めに

成りませぬゆゑ。

山 紅

「御厭でも御座んせうが、勉めて此方へお出ましなされませ。」

「それでは皆の言葉に従ひ、少時の間出ませうか。」

ト管絃の合方にて、前幕の山吹姫、垂髮鬘、好みの拵へにて几帳より出で、褥の上、脇息に依りて住ふ。

山 「夏の暑さもいつしか過ぎ、秋は高雄樹尾の、紅葉もさぞ思へども、吾家の庭さへ歩くにもものうく、此身ばかりは冬籠、花咲く春には逢へぬわいなア。」

ト愁みの思入れ。

「常は長閑におわせしに、此頃は打つて變りて。」

「しめり勝なる御顔を、見上げまする妾供。」

「委しい事は存じませぬぞ、其御心を察しますると。」

「思はず胸がふさがりまして、悲しい事。」

皆々 青 白 紅 黄

「御座りまする。」

山 紅

「好い事ばかりおぼえて居て、苦しい事は忘れるやうに、何故生れて來なんだか、それが恨みで成らぬわいの。」

「ほんに左様で。」

皆々 「御座りまするな。」

ト詔への合方にて、向ふより侍女紫女、垂髮鬘、好みの衣裳にて出來り、花道にて留り。

「御庭口から忍びの御使ひ、急ぎに急いで歩んだなれど、女の足のは

かどらず、遅なはりて申譯がない事ぢや。」

ト同じ合方にて本舞臺に來り、枝折戸を明て這入り。

「只今歸つて参りました。」

紫 黄

「おう紫女殿には御かへりか。」

「御苦勞で御坐んしたなア。」

ト紫女二重に上り、好き處に住ふ。

山

「紫女か待わびて居たぞや。」

紫

「御表へは内所の事とて、密かに姫君の御つかひ、清見のイエなに清

山

水寺に詣でまして、御祈願籠めて参りました。」

紫

「して御園の御告は如何なりしぞ。」

山

「凶でも無し吉でも無し、それに就さまして姫君に、内密にて御話が

御座り

ますれば、皆さまには少しの間、御遠慮なされて被下りませぬか。

黄

「それは承知で御坐りまする。」

紅

「左様なれば御用の節は。」

白

「鈴にて御呼び。」

青

「被下りませ。」

山

ト唄に成り、皆々上手へ這入る。跡見送りて膝をすゝめ。

「清見の殿に御目もじ仕やつたか。」

紫

「はい折好く御目に掛れまして、始終を御話し申せし處、彼の御方も

山

一方ならず、御胸を痛めあそばしました。此には豫て所存もあれ

紫

ば、後程ひそかに裏庭より、忍んで行て口づから、姫君に御話ありと

山

の御返事に御座りまする。」

紫

「御顔を見るは嬉しけれど、窶れた姿を御見せ申すが、羞かしうて成

山

らぬわいの。」

紫

「何んにしても遠からず、此所へ御いでと存じますれば。」

山

「見苦しからず四邊をかたづけ。」

紫

「御待ち申すと致しませう。」

山

トバタ／＼にて、上手より侍女一人出来り。

侍

「只今大殿には、御臺所、御一所にて、御見舞にお出で御座ります

る。」

ト直ぐに引返して這入る。

山

「折も折とて父上母上。」

紫

「御入來どあれば、尙の事。」

山

「取かたづけねば。」

紫

「相成りませぬ。」

山

ト紫女鈴を振る。以前の侍女四人出來り、四邊を片付け、褥を敷き

座

座を設けて這入る。管絃にて前關白松殿基房、烏帽子狩衣好みの

拵

拵へ、奥方藤の方、垂髮鬘、小うち衣、好みの拵へにて、上手より

出來

出來り。設けの席に住ふ。

基

「珍らしや、床を離れて此所に出て居やるのは、氣分の常より好き故

にや。」

藤

「それにしては顔色のすぐれたやうにも、見えませぬが、押して出迎

へ仕やつたのか。」

基

「親に遠慮は入ぬ事、床に就て居るが好からう。」

山

「いえく、押していは御座りませぬ、いつもたれこめて居ります故、

紫

氣が變つてよろしからうと。」

基

「それゆゑ御出ましに御座りまする。」

山

「それなれば安心なるが、子を思ふは親心、巢を守る鶯のそれならね

ど、猿に雛を奪はれて、怒り悲しむ其様は、情けに迂き獵人すら、身

につまされて泣くとかや。」

基

ト思入ありて。」

山

「鳥類ですら其通り、況や人の親として、子を思はぬはあらねども、

紫

時には親の子を捨て、大義を立てねば成らぬぞや。コレ姫よ、今日は

又もや親として、言ふに忍びぬ事を勧めに、實は斯うして参りしぞ。

山

ト床の上るりに成り。」

上

父が言葉に早それど。姫はさとりて悲しさに。」

ト

山吹姫悲しき思入。」

上へ俯向く顔を見るに付け。苦さ胸に疊まれて。迹の言葉も出でやらず。

少時は途絶て居たりけり。

ト基房言ひかねてヂツと思入。皆々愁ひの模様。

上へ斯くては爲らじと。氣を取直し。

基 「こりや姫よ、父の口から此様な、無理を其方に勧むるは、忍がたき

事なれど、何卒木曾義仲の、望みをかなへて婿と爲し、添遂げては呉

やらぬか。

藤 「今も今とて催促の、返答さかんと義仲より、使者の來りて待つて居

れば、其方が厭とは好く知れど、又もや勸めに來ましたわいの。

基 「無慈悲な親と思ふであらうが、我もそれは好く知つて、知つてく

知りつくし、其上にての願ひなるぞ。

上へ言へど答へも。泣ばかり。見るに見兼ねて。藤の方。

藤 「それ程までに厭なのを、常なら押ししてと言はねども。

基 「言はねばならぬ今日の旨義、其方ばかりか我とても、好まじからぬ

婿なれど、天下の爲めには是非もなし。

上へ世に美しく生れたる。其方の不幸。生みたるは。親の無慈悲と成り

たるか。

基 「委しく語るは初めてなるが、權威を恐れて義仲に、其方を嫁がすわ

けならず。

ト下座の合方に成り。

基 「知る如く義仲は、木曾山中に人と成り、軍に馴れても禮節は、少し

も知らぬ猪武者。平家に代りて都に入りしが、院の御所をもはゞから

ず、亂暴狼籍至らぬ隈なく、寺院を焼き、人家を掠め、官職自儘に動

かすなぞ、思切つたる舉動は、悪鬼羅刹も及ぶまじ。諸人の難儀言ふ

までもなく、此上如何になりゆくべきか、畏こき邊の御方にも、一方

ならぬ御心勞。

藤

「これと申すも心のみ、只一筋に猛くして、優しき節を知らぬゆゑ、其所を丸めて柔らぐるは、才ある女の働きより、外にはあらじと院の御評議。」

基

「幸ひなるは義仲の、彼の釣殿にて其方を見染め、只管所望は天の賜物、上の御憂慮、諸人の難儀、救ひ得べき大任を、果すにたより此上なしと、人も言ひ。」

基

ト思入あつて。
「我も思ひ。」
ト床の合方に成り。

基

「それゆゑにこそ無理とは知れど。」

藤

「父上と共に、この母までが手を突きて。」

基

「子に折入つて。」

兩人

「頼むぞや。」

上 道をわかちて説立てられ。いよ、苦しき山吹の。身も世にあらぬ悲

しみに。絶えも入りなん風情なり。

上

山吹姫よろしく悲しき仕打。

上

外には來かゝる一人の若者。仔細あらむと枝折戸の。陰に隠れて聴居たり。

上

清見秀光下手より出來り、枝折戸の陰にかくれて聴いて居る。

山

「好う分つて居りまする、父上、母様、よう分つて居りますれど、眞から好かぬ義仲殿、それさへあるに我身には。」

上

清見の關や三保の松。幾千代かけて契るべき。

山

「許嫁の殿ありながら、如何ふりすて、行かれませう。」

基

「さ、其言評は道理なれど、天下の大事に代へられぬわ。其方も藤原基房の、娘にてはあらざるか、義に反きて大義を立て、操を破りて

操を守る、其けじめが分らぬか。是程までに申しても、従はぬとは詮方なし、父も覺悟を。

山 基 「ひえッ。

山 基 「せにや成らぬ。

山 基 「そりや父上には御覺悟を。

山 基 「わそばす事に。

山 基 「相成るわえ。

上 怒りつすかしつ。いろしに。説く其中へ紫女が。

紫 下座の合方に成り、紫女進出で。

紫 「妾風情の差出まする、處にては御座りませぬと、御見かね申して恐れながら、御二方に御願ひが御座りまする、此御返事は今夕まで、御待ちなされては被下りませぬか。

基 「我は少しも構はねと、最前よりして客殿には、木曾の使者の待つて居れば。

藤 「なる事ならば今ちやツと。

紫 基 「其處を何卒今しばらく。

紫 基 「折角の頼みゆゑ、さらば是非なく今夕まで、返事を聴くのを相待た

ん。

紫 基 「御さ、届け被下りましたか、難有う御座りまする。

侍 トバタ／＼にて上手より侍女出來り。

侍 「申上げます、木曾殿の御使者には、過度返事が長引くとて、御立腹

の御様子に御座りまする。

基 藤 「使者を立腹致させては、後に至りて面倒なり。

基 藤 「そんなら直ぐに此由を、傳へに御越しなされませ。

基 藤 「君の大事と忍ぶ身は、彼等にまでも頭を下げ、無念の事も。

ト氣を變へ。

「姫には大事に致すがよいぞ。」

上「心のこして入りける。」

侍女先きに、基房、藤の方、上手に這入る。

上「迹見送りて山吹姫。さうぢやとうなづき懐剣を。抜くより早く突立てんと。急るに驚き。留める紫女。庭口よりは清見秀光。」

ト山吹姫懐剣にて喉を突かうとする紫女あわて、留める。以前の清見秀光も走出て留める。

紫「こりや姫君には何故に。」

「生害せんとは仕給ふぞ。」

清山「いつの間にやら清見の殿。」

「様子は残らず聴きました、義を捨て、操を捨て、操を守れど、基房卿の御言葉、垣越ながらに吾耳には、好く入りたるに何事ぞ、傍にありたる御身にして、聴かれぬ事の訝しさよ。」

山「それぢやと申して。」

清「ハテミアこれは御渡しなされ。」

上「剣は鞘に納めても。切る、縁のためしには。生木裂くこそ。」

ト秀光懐剣を取りて鞘に納める。山吹姫は泣伏す。紫女は之をなだめる。此模様、時の鐘、三重にて道具廻はる。

○同 基房卿屋形の場

本舞臺四間の間、常足の二重。白木造りの家躰。欄間。上下一間の附家體。翠簾を下し。正面縁張の襖中の畫好みあり。都て基房卿屋形の體。茲に前幕の太夫坊覺明、坊主鬘、烏帽子、直垂、好みの拵へにて立かゝりて居る。家臣大勢留めて居る。此見得早舞の合方にて道具留る。『いや、何時までべん、と待つて居ても、埒の明く事では御座らぬ故、愚僧は一先づ歸館致す。』

○ 『でも御座りませうが、只今直ぐに主人の殿には。
 △ 『御返事を致されますゆゑ、少時の間
 皆々御待ち被下れ。』

『いやだ〜厭で御座る。』

ト勢込んで行かうとする。皆々留める。此時此上手にて。

『わいや、基房それへ参るまで、御使者には御待被下れ。』

ト合方にて以前の基房出来り、二重上手に住ふ。覺明すかく〜と二重に上り、突立ちたる儘。

覺

『おう松殿か、あまり御返事が遅きゆゑ、愚僧は歸館と存せしが、御呼留めあるからには、定めて首尾好い御返事で御座りませうな。』

覺

『さア其返事は今しばらく、御猶豫を願ひたし。
 『しばらく〜は聴きあき申した、宜敷う御座る、最早や御返事には及び申さぬ、此由義仲公に言上して、キツト返報致すで御座らう。』

基 覺 基 覺

『左様にても候はんが、何卒其處を今夕まで。』

『成り申さぬ、相成り申さぬ。』

『すりやこれ程に申しても。』

『くどう御座る。』

ト立上り、向ふに行きかゝる。基房是非に及ばぬと言ふ思入。此時上手より藤の方出来り、基房にさゝやく、基房キツと成り。

『木曾の御使者御待ちやれ。』

『又か。』

『今夕までの猶豫に及ばぬ。不つゝかなる山吹を、ソレ程までに御所望とならば。』

『なんど。』

『義仲殿につかはし申さん。』

『すりや御承諾ありしとな。』

覺 基 覺

基 『如何にも。』

『やれ〜これで役目が済んだか、斯うなれば少しも早く、君に申して御喜びの、顔を拜すと致さうわえ。
ト下り葉にて覺明向ふへ這入る。跡見送りて基房と藤の方顔を見合せ、愁ひの思入。家臣皆々愁ひの思入。此模様キザミにて、幕。』

○五幕目 旭將軍夢見の場

本舞臺土塚の道具幕。ドンヂヤンの鳴物にて幕明く。
ト向ふより軍卒大勢バタ〜にて出來り、上手に駆て這入る。跡知らせに付き道具幕切つて落す。
本舞臺一面の平舞臺。後黒幕を張詰め、雨窓を下し舞臺を暗くする。大ドロ〜にて前幕の義仲、立茶筌鬘、白小袖、刺貫、脇息に依りて居る。此見得にて真中にセリ上げる。下の方は前幕の山吹姫、垂髮鬘、白小袖、

緋袴、檜扇を持ちて居る。此見得大ドロ〜にてセリ上げる。

ト詔への合方に成り。

義 『これ山吹姫、何を御身は其様に、物思はし氣に立つては居給ふ、例の琵琶を聴かされぬか。』

山 『それは手やすき事なれど、貴下はいつでも御眠りあそばし、少しも御聴きなされぬゆゑ、弾きます甲斐が御坐りませぬ。』

義 『御身の琵琶を聴く時は、雲上に遊ぶ心地して、思はず知らず眠るのも、筋骨ゆるみて猛々しき、心挫けし證據なり。早瀬は淵と成り、山坂は野原に變り、此頃の義仲は、木曾冠者の面影留めず、征夷大將軍の官職を帯びてより、少しは重々しくなつたと言ふ、人の噂を耳に聴くのも、全く御身の所業にて、昔は耳に糸の音を、聴くに得地へず弾く人を、怒りて追ひし程なるに、眠りて後は知らずとも、琵琶を聴かんと此方より、所望をするとは我ながら、我に驚くしほらしさ。』

山

「それ程までに妾をば、御思ひなされて被下ります、御情深き真心を、上部ばかりか此頃は、心も解けて真底から、嬉しう御坐んす義仲君、必らず見捨て被下りまするな。」

義

「何んの見捨て好いものか。」

山

「お嬉しう御坐りまする。」

ト大ドロくにて山吹を消し、前幕の巴御前、白小袖、緋袴、山吹と
同じ袴へにてせり上げる。巴御前嫉妬の思入にて。

巴

「御情けなし義仲君、木曾の昔を早や忘れて、荒くれのこの巴には、男のすなる軍をさせ、京女郎の美しさに迷うて、毎日の御遊興、次第々々に情弱となり、東に頼朝、西海に、平家の敵のある事をも、忘れ給ふとは何事ぞ、妾は決して嫉妬にて、申上げるには御坐りませぬぞ、それでは行末おぼつかなければ、憂慮の餘り憚りながら、申上げるので御座りまする。」

義

「忝けなきは其方の諫言、決して悪くは思はぬぞ。去りながら、許せよ、巴、ひとたび情の激しては、留めがたき義仲なり。我この癖を知ると雖も、堪ゆるに難く押へかね。心の走るまゝにして、今日が日までは送りしなり。さりとて我は糟糠の、妻を堂より下すなぞ、左様な不實は致さぬぞ。」

巴

「其御言葉が眞實なら、再び何も申しませぬぞ、心が、りは。ト大ドロくにて巴御前を消し、清水冠者義高、烏帽子直垂にて、セリ上げる。」

清

「左すれば父上何故に、佐殿との誓約を破り、都に先登あそばされしぞ。一應鎌倉へ御通達ありて、其後の御上洛ならば格別、左なきゆるに人々は、御自立の企謀ありと、悪様に申すなり。」

義

「人は何と申すとも、佛神も照覧あれ、何とて我に私念あらんや。鎌倉へ通達なすして、義仲が火急に上洛なせしは、必勝の時期を過ま

りて、平家に充分備へあらしめては、却つて大事と思ひし爲めなり。
ト此前に清水冠者を消し、前幕の權頭と兼遠、白衣の直垂にてセリ上
げる。

權

「然らば何故西國に、一度出立なしながら、平家を亡ぼし寶器をば、
取りかへす事能はずして、急に都へ歸られしぞ。未だ其上に都の町々、
人家に亂入狼籍して、金錢衣食を掠められしぞ。」

義

「これ則ち藏人行家、わが恩儀をも打忘れ、鼓判官と心を合せ、我を
法皇に讒言せし爲め、引返して其無實を申開かん爲めでありしぞ。金
錢衣食を強奪し、都を大いに鬧がせしは、行家等市人と腹黒くも心を
合せ、物價を俄に高くして、吾軍勢を苦しめんとの計略なりと、見拔
きしゆゑ。」

權

「左すれば法住寺殿を焼はらひ、四十九人の官職を、俄に奪ひ給ひし
にも、必ず御意見あるならん。ソレを承はりたく存じまする。」

義

「如何にもそれは行家はじめ、鼓判官の讒言に、皆もとひせる處なり。
山門南都の衆徒をかたらひ、畿内近國の武士を集めて、我に朝敵の名
を被らしめ、構へて討取らんと仕給ふゆゑ、空しく手を束ねて死を待
つべきにあらず、已むを得ず彼の判官の、首を得んとて法住寺殿に押
寄せたるなり。又四十九人の官職を止めしも、以來姦佞を遠ざけんと
の心なり。」

權

「さらば何故に平家方と、和睦せんとは仕給ひしぞ、これにも仔細の
御坐あるにや。」

義

「既に前にも答へたる如く、行家等が奸計に妨げられ、西國下向に遅
れたる内、平家神器を載せたる儘、新羅か高麗へ落行きなば、容易な
らずと思ひし故、油斷をさせて西國に、留らせんと此方の計畧。」

權

「左ほどに深き思慮ありながら、何とて征夷大將軍の、官職を受け給
ひしぞ。」

「我苟しくも高倉の、宮の令旨を頂きてより此方、九夏の天にも甲冑を解かず、玄冬の夜にも郊野に臥して、千辛萬苦なしたる事、上に達してそれ故に、功を賞する任命なり。斯程の事を受けたりとて、何程の事あるべきぞ。」

「むは、むは、それは大きな間違ひなり、手負猪にはさからふなど言ふ、諺あるを知らしめさずや。世には郎君の天真を、愛する程の大量の者なく、郎君の人に秀れたる處を、人は殊の他厭嫌ひ、上は法皇を初めとして、下は牛飼の童まで、今は遙かに佐殿を、慕はぬものとして候はず。全く鎌倉勢の來るまで、郎君を釣るに餌を以てし、なだめすかして置く爲めの、征夷大將軍とは知り給はぬか。」

「や、や。」
「悟り給へや義仲公、さめ給へや淨世の夢。」
ト大ドロくにて二人を消す。知らせに付き黒幕を切つて落す。

○同 山吹姫最期の場

本舞臺三間の間。高足の二重。三方折廻はして檜皮葺の庇。同じく椽側。白木の高欄。三方一面に翠簾を下げ、真中高欄付きの階段、椽の下を見せ。上方網代垣。眺への立木。下方一間高欄付きの續き屋体。廊下の模様、都て五條の館の躰。鳴物打上げる。

ト床の上るりに成り。
上へ夢こまやかなる寢殿の。翠簾の内には義仲公。山吹姫と今生の。わかれに時をうつしけり。折から聽ゆる関の聲。連れて馳來る二人の勇士。

ト大小入り眺への合方に遠寄を冠せ、バタ／＼にて向ふより前幕の根井太彌太、楯六郎。大童、腹巻、手負の扮装にて出來り。階段の左右にベツタリと成り

根 楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯

「吾君には、未だに御出馬あらざるか。」
 「宇治川の合戦は、口惜しくも味方の敗北。
 敵勢最早や洛中に、押寄せて参つたり。」
 「いつまで名残を惜しみ給ふぞ。」
 「女子の爲めに大事を過るとは。」
 「御大將の耻辱ならずや。」
 「東國勢の物笑ひを受けんより。」
 「いさぎよく御討死あるか。」
 「但しは一度都を落ち。」
 「再舉を御計りなさるか。」
 「いづれになりと此場にて。」
 「御決定のはど。」
 「願はしう存じまする。」

楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯 根 楯

上 聲張揚げて呼はれど。答へは更になかりけり。顔見合せて吐息つき。
 ト根井、楯と顔見合せ。
 「斯くまでに言上しても、さらに御出馬なき上は。」
 「最早や我等もこれまでなり、存命へて耻を搔んより。」
 「此場を去らず。」
 「最期を遂げん。」
 上 肌くつろげて兩人は。太刀抜きはらひ。吾腹へ。力に委せ突立て。
 上 兩人腹巻を取り、肌をくつろげて太刀を突刺す。
 上 かつぱと伏して其儘に。此世の息を引きにけり。
 ト兩人落入る。
 上 やうやくそれと心付き。翠簾をかゝげて義仲公。
 ト内より簾を卷上げる。
 正面好みの畫襖。几帳、黒棚等よろしく。几帳の陰に長枕見える。上の

方に甲冑附太刀など取散らしてある。此所に以前の義仲直垂好みの拵へにて立かゝり居る。以前の山吹姫、小うち衣、好みの拵へにて、義仲の袖に縫つて居る。

山 義 「いつまで斯くてあるべきぞ。イザくこれより出陣なさん。

山 義 「それでは最早や吾君には。

山 義 「これが今生の別れなり、出陣なすは潔好く、討死との覺悟なるぞ。

山 義 「すりや御討死の御覺悟とな。

山 義 「イザ花々しく切死の、五體を飾る甲冑を、最後の肌に着すべし。又

脱ぐ事もなかるべし、御身の手づから紐を締め、上帯結んで給はれよ。

上 「あいとは言へど結ぶには。かたき契りの今日切れて。女の力大衆を。

つなぎ留むると聞くからに。山を抜けてふ丈夫も。虞氏のわかれのい

とつらく。

ト甲冑を手傳うて、山吹は義仲に着せながら、いろく愁ひの仕打あ

る。其内義仲二人の死骸に目を着け。

義 「不憫や楯も根井と共に、冥途の先駆なしたるか、樋口は如何に、今

井は如何に、四天王さへ分散なせしに、義仲如何でながらふべき。

上 「さらば行かんと立上り。歩む後より繩付き。

ト義仲行かうとする。山吹姫留める。

山 「これまで包みて居りましたが、此期に及びて只一言、この山吹が本

心を、打明けますれば義仲君、御聴きなされて被下りませ。

山 義 「なに本心を打明けるとは。

山 義 「其本心とは。

ト隠し持ちたる懐劍にて喉を突く。

山 義 「や、何故に其自害。

ト篠入の合方に成り。

山 「誠は父の内意を含み、味方の様子をさぐりては、一々内通なしたる

山 「これまで包みて居りましたが、此期に及びて只一言、この山吹が本

心を、打明けますれば義仲君、御聴きなされて被下りませ。

山 義 「なに本心を打明けるとは。

山 義 「其本心とは。

ト隠し持ちたる懐劍にて喉を突く。

山 義 「や、何故に其自害。

ト篠入の合方に成り。

山 「誠は父の内意を含み、味方の様子をさぐりては、一々内通なしたる

のみか、郎君の心をやはらげて、諸人の難儀を救はん爲めに、心ならずも従ひて、今日まで添ひたる妾に御坐んす。好しや忠義の爲めとは言へ、直ぐなる心の郎君をば、妾の愛に溺らしめ、大事の合戦をわやまらせ、斯かる次第に成りゆきしも、皆んな妾のなせる罪、御ゆるしなされて被下りませ。

義

「何んの詫に及ぶべき、斯くなりゆきしはそれのみならず。義仲の氣性今の世に遇はず、吾眞意を過まられて、夫故の敗北なり。好しや御身の色香に迷ひ、愛に溺れて義仲は、身をわやまりしと人言ふとも、御身の如き淑女の爲めには、如何なる浮名も厭ふまじ。

山

「そりや悪しども思ひ給はず。」

義

「一層可愛く思ふぞや。」

上へ 手負の脊に手を掛けて。飛ぐ涙どあはれなる。

ト 義仲愁ひの思入。

上へ

折柄又もや人馬の聲々。

ト 大小入り眺への合方、ドンヂヤンにて、向ふより以前の巴御前、立烏帽子、鎧、直垂、長刀を持ち。前幕の大室小彌太、落合三郎、甲冑弓矢を持ち、軍卒大勢附従ひ出來り。直ぐ本舞臺に來り。

大 「東國勢には宇治川を押破りて、義經の軍勢は、早や院の御所をかためて候。

落

「瀬田のたよりは候はねど、これとても範頼の、ひきゆる軍勢山河に満てば。

大

「危き事に。」

大落

「候なり。」

巴

「此所も今に取圍まれ、攻落さるゝに極りたれば、少しも早く立退き給へ。」

大

「最後の戦あそばすか。」

落 又留りて御自害あるか。
 大 西國に行きて平氏に合し給ふか。
 落 北國に走りて再舉を計り給ふか。
 巴 いづれに御定め。

皆々「なされまするや。」

義 「今更いづくに行くべきぞ、只一たび瀬田に行き、範頼を防ぐなる、

兼平と合體なし、潔好く討死と、心を既に定めたり。

巴 「然らば直様殘兵集めて。」

義 「重圍を破り。」

皆々「出立なさん。」

上「此は近江に。彼は又。彼世に急ぐ西の國。」

ト山吹姫落入る。

上「末はひとしく。」

ト皆々愁ひの思入。ドンヂヤンの鳴物、三重にて、幕。

○大詰 巴御前勇戦の場

本舞臺一面の平舞臺。向ふ遠山を見たる書割、上下立木にて見切り、都て粟津原の躰。茲に内田三郎家義、甲冑附太刀の拵へにて立かゝり居る。軍卒大勢立かゝりて、此見得風の音、ドンヂヤンの鳴物にて幕明く。

内 「木曾義仲を征討せんとて、佐殿の命に従ひ、義經公には宇治川より、範頼公には瀬田川より、共に都へ攻寄せられしが、如何で義仲の防ぎ得べき、散々の敗北にて、主從僅かに六七騎、此方へ落ちて参るとやら、中に巴と言ふ女武者は、音に聴えし剛の者にて、百人力あるとやら、拙者には六十人の力ある故、後の不足の四十人力は、方々に満されよ、生擒つて手柄にせむ。」

皆々「心得ました。」

トドンヂヤンにて向ふより前幕の巴御前、垂髪髻、白の鉢巻、鏡直垂好
みの拵へにて、長刀を抱へ出で、花道にて留り。

巴 「それにおはするは何人ぞや、東國にては小山宇都宮の殿か、千葉三
捕の殿か、御名こそ聴きたけれ。

内 「いや、これは、遠江國の住人にて、内田三郎家義にて候。和御
前は木曾殿の側女、巴御前と見たが僻目か、好んで女を敵に取るべき
にはあられざれど、鎌倉殿の一度和御前を見たくおほせあれば、斯くは
待受けて候なり。

巴 「如何にも妾は、中三權頭の娘にて、巴と申す女なり。主の名残の惜
しまれて、行方を見んとて御伴に侍べるなり。何として御身等如きに、
生擒れて好きものか。イザ、首を捻切つて、軍神の血祭に供へ申さ
ん。

内 「何を小癪な。

ト入亂れて軍卒をからみ、はげしく立廻りながら、ト、上手へ追ふて
這入る。引違へて上手より、前幕の今井四郎兼平、甲冑好みの拵へ、
弓矢を持ち、乗馬にて出來り。

「無念なれども範頼に、瀬田のかためを破られて、最早や防ぐに力な
し。討死とは思へども、一たび木曾殿の御目にかゝり、其上にて決す
べし。

ト馬を花道まで進め、キツト成るを道具替りの知らせ。大小入りの詔
への合方にて此道具廻る。兼平向ふへ這入る。

○同 栗津原別離の場

本舞臺一面の平舞臺。向ふ湖水を見たる書割。所々に松の立木。好き處
切株あり。上下松の立木にて見切り、日覆より松の釣枝を下し、都て栗
津原松原の躰。爰に前幕の義仲、甲冑附太刀好みの拵へにて、真中の切

株に腰を掛けて居る。前幕の大室小彌太、落合三郎、甲冑好みの拵へ、
 弓矢を持ち、兩方に腰を掛けて居る。左近五郎、岡津平六、佐竹藤六、
 皆々甲冑の拵へ、弓矢を持ち、切株に腰を掛けて居る。上手の松の立木
 に義仲の乗馬を繋ぎてある。此見得遠寄にて道具留る。

ト誂への合方に成り。

「我北國を出てより、初めて都に入りたる時は、六萬餘騎の大軍にて、
 登る朝日の勢ひなりしが、今落日の有様に、味方は僅か六騎と成り、
 尻に馴れたる薄金の、鎧もいたく重味を覚え、力も折れて松の根を、
 立つに物うくなりたるぞや。一徹短慮の吾氣性、左あらぬ事にも大聲
 して、叱飛ばすを心にも留めず、主と思へば今日まで、好くぞ仕へて
 呉れしよな、其方達こそ義仲の、義仲たるを知る者ぞ。それに引變へ
 世の人は、吾本心を得知らずして、
 ト床の上るりに成り。

上へ 君には不忠。人々には。只狼籍の大將と。言はて果つるは口惜し。

ト無念の思入れ。

「察して呉れよ人々。

大 義 「さぞ御無念とは存じますれど、天運未だ廻り來らず、敗軍なせしは
 是非もなし。

落 「時代に連れてながらへる、白痴とならぬは幸ひなり。

「此上は快よく、思ふ儘に働きて、死期を東國勢に笑はれまじ。

「名は末代と申すなり、御情深き大將の。

「御馬前にて討死なすは、末期の思出此上なし。

「多くの人より死おくれ、今日まで遣りしは。

「命の惜しき爲めならず。

「今日の合戦」

皆々 「なさんが爲め。

大 義 「さぞ御無念とは存じますれど、天運未だ廻り來らず、敗軍なせしは
 是非もなし。

落 「時代に連れてながらへる、白痴とならぬは幸ひなり。

「此上は快よく、思ふ儘に働きて、死期を東國勢に笑はれまじ。

「名は末代と申すなり、御情深き大將の。

「御馬前にて討死なすは、末期の思出此上なし。

「多くの人より死おくれ、今日まで遣りしは。

「命の惜しき爲めならず。

「今日の合戦」

皆々 「なさんが爲め。

義 『勇まし、頼母し、此上は兼平にめぐり合ひ、一體と成り奮戦なさん。

上 名残の光り。鎧の袖。血汐を照らす。折しもわれ。

ト皆々身づくろひする。

上 一散ばしりに駆來る兼平。

ト大小入り誂への合方にて、以前の兼平、向ふより、乘馬にて出來り、

花道に留り。

今 『おうそれにおはすは吾若か。

義 『今井四郎か。

皆々 『兼平殿か。

今 『變り果てたる。

義 『對面かな。

上 ひらりと飛降り繋ぐ間も。荒馬捨て纏付き。

義 ト兼平本舞臺に來り、馬より飛降り、義仲と手を取交し。

『我早や六條の川原にて、既に最期と存せしかど、一たび其方に遇ひ

たさに、敵に後を見せながら、辛くも此所まで來りしぞ。

今 『拙者とても瀬田川にて、いさぎよく斬死と、覺悟は一端極めました

れど、臨終の際に只一目、君の御顔を拜したく、斯く駆付けたる其途

中。

義 『覺束なしと思ひたる、此世の對面嬉しさは。

上 なたき誓ひの石山や。其御佛の導きか。

『稚き頃より共々に、遊ぶも同じ竹を切り、弓を造りて射し事も。

『駒ヶ岳なる野馬を狩り、互に乗りて暮せしも。

『昨日のやうに思はるれど。

『今日は互ひの身のをはり。

義 『武運に盡きたる主従か。

今「同じ粟津の露と成る。」
上「盡させぬ縁と見合する。顔も互ひに打やつれ。涙も脆くなりにつけ

ト兩人愁嘆の思入れ。

上「時しも吹來る比叡山嵐。連れて駈來る。巴御前。」

ト詔への合方にて以前の巴御前。向ふより出で、直ぐ本舞臺に來り、
下手に住ひ。

巴「吾君にも兄上にも、此所にお在なされましたか、敵は益々群がりて、
程遠からず成りましたれば、御要意ありて然るべし。」

「さらば一先づ此所を引上げ。」

「彼なる岡を後楯に取りて。」

「矢種の盡さるそれ迄は。」

「防ぎ矢射たる其上にて。」

左「せめては大將範頼の。」

「首を目當に突進なし。」

「刀の目釘のついくまで。」

「切つて〜。」

「切りまくらむ。」

ト皆々立上る

「妾も御供。」

ト立上る。

「いや待て巴、其方はこれより姿を變じ、本國へ立歸れよ。」

上「思ひがけなき義仲の。言葉に巴は胸轟き。」

ト巴御前驚きたる仕打あつて。

「すりや御供はかなひませぬか。」

「さればなり、義仲ともあるものが、最後の際まで女を具し、共に軍

巴 義

をなしたりと、後の世までも語られんは、如何にしても無念なり。

巴

「すりやそれ故に御供は、かなひませぬので御坐りまするか。」

義

「如何にも、今言ひたる通り、其方は此戰場を落延びて、本國木曾に立かへり、先きに失せたる郎従の、妻子等に義仲が、傳ふべき言葉あり、夫もたらしめて歸るべし。」

巴

「いやで御坐んす。」

義

「何んど。」

巴

ト床の合方に成り。

義

「兄と共に此巴も、稚き頃より御馴染申し、一日たりども御傍離れず、合戦の場にも御供して、君の御用を達しまするには、只何事もあいくど、今日まで一度も御言葉を、反さし事は御坐りませぬと、こればかりは如何しても、厭で御坐んす、厭で御坐んす。」

義

「聽分のなき女かな。」

義

ト下坐の合方になり。

「其方の心にては今日まで、傍を離れずに附添ひて居たる故、末期の際に見捨てゆくは、忍びぬ處と思ふならむが、夫は大きな過失なり。我今此所に死するに臨み、故郷の者に傳ふべき、言葉を記して歸るのは共に死ぬより却つて忠なり。他の者とは思へども、斯く取圍まれたる戰場を、男子は立ち立て抜出でがたし。其故そちに頼むのぢやが、斯くても其方は厭と言ふか。」

上

「鋭き言葉に胸打れ、涙に聲を細らして。」

巴

ト巴御前苦しき思入ありて。

義

「はい、厭で御坐りまする。」

巴

「これ程までに申しても、聽かぬとあらばもうこれまで。木曾に耻辱をあたへる女、主と思ふな、勘當ぢやぞ。」
「ええッ、そんなら故郷へ歸らぬ時は。」

義 「永き世までの勘當ぢやぞ。

巴 「今と成て勘當とは、尙更厭で御坐んすわいな。

義 「然らば故郷へ立歸るか。

巴 「さア其儀は。

義 「勘當仕やうか。

巴 「さアそれは。

義 「故郷へ歸るか。

巴 「さア。

義 「さア〜〜返事は如何ぢや。

上 「今は巴も力なく。押して言はれぬ悲しさに。

巴 ト巴悲しき思入れ。

上 「從ひまするで御坐りませう。

上 甲の袖をひさちざり。聲を上げてぞ泣ひせぶ。

義 ト巴泣伏す。

「合點行きなばそれで好し、機嫌直して早く行け、敵の來らぬ其内に、少しも早く此所立去り、故郷の木曾に立かへり、數多の武士を死せたる、朝日將軍義仲も、粟津の原に失せたりと、女房や子等に傳ふべし。之より他に言葉は無し、早々〜急げ。

巴 「とは言へ、如何も。

義 「未練であらうぞ。

巴 「さらば、吾君。

義 「巴。

巴 「兄上。

今 「妹。

巴 「方々。

皆々 「巴殿。

巴 『さらば。』

皆々 『さらば。』

上 『さらば』と夕暮の。鐘も音せぬ三井寺の。邊は敵に充滿し。道

なからむと行く渚。湖水傳ひに。

ト巴愁嘆あり、ト々思切つて一散に向ふへ駈けて這入る。皆々見送る。

此時矢飛んで来て松の木に立つ、これにて皆々キツト成る。此模様、

波の音、三重にて道具廻はる。

○同 合戦の場

本舞臺一面の平舞臺。向ふ在家を見たる書割。同じく松原つゞきの体、
ドンヂヤンの鳴物にて道具留る。

ト上手より以前の大室小彌太、落合三郎、左近五郎、岡津平六、佐竹藤
六、軍卒大勢を合手に立廻りながら出来り、はげしき合戦よるしく。

ト、大室、岡津は本花道、落合、左近は假花道。兩方へ追うて這入る。
直ぐ大小入り誂への合方にて義仲兼平乗馬にて上手より出来り。

令 『最期は今とせまりて候、向ふに見ゆる一村の、松の下にて我君には、
静に御生害めさるべし。兼平これにて敵勢を喰留め、一人も通す事では
御座らぬ。』

義 『さらば兼平これが死別か。我今更何を言はん。見よ〜八幡の社前
にて、甲の袖に輝きたる、朝日も今は西の方、光りを納めて雲に入る
なり。』

今 『人間一生は永けれども短かし。』

義 『春とは言へど太郎月、短き日さへ今日のみは。』

今 『互ひに長く。』

兩人 『おぼえたり。』

ト馬の頭を向合せて思入ある。此所へ軍卒三階總出にて出来り、二

人を取巻く、此模様詔への鳴物にて。

拍子幕

(明治二十七年十月脱稿)

此編は、主人公たる義仲の性格も現はさむきて、全力を盡したる爲、他の役は甚だ活動を欠きたるを覺ゆ。加之、旭將軍が一代を締め、出生より運命までを舞臺の上にて示さむとするには、勢ひ説明口調を主人公自らの口にせざるを得ざるなど、苦心少なからず。更に此稿、事情に迫られて、僅々三晝夜に書き終りたる以て、拙劣甚だ見るに耐はず。ゆるし給へ。

佐々木盛綱

○上の巻

藤戸渡浦平殺害の場

本舞臺一面波を書割りたる道具幕、上の方に芦疊、下手同じく。茲に軍卒×△□○立かゝり居る。雨窓をおろし、波の音に雨車を冠せ幕明く。△「此度我君範頼公、平家追討のおほせを受け、當國藤戸の渡場まで、勢込むで押寄せられしが。

□「一度讃岐の屋島まで、落延びたりし平家の奴原、今となつて目が覺めたか、左馬頭行盛を、俄仕立の總大將。△「飛彈守景家はじめ、下侍を引連て、二千餘艘と言ふ觸込み、當國兒島に上陸なし。

○ 『下世話に申す鯨鯨が、潮待つ様な陣構へ、此所で我等が軍勢を、食止めると云ふ心なるか。』
 『仮令如何程あせるとも。』
 『一たん浮足立ちたる上は。』
 『如何で源氏に敵すべき。』
 『何程の事御座らむや。』
 『さりながら油断は大敵、海を隔て、居るとは申せど。』
 『其間は僅か四五町にて、呼べば答への聴ゆる程。』
 『彼の富士川の返報に、濱千鳥でも追立て。』
 『夜討と見せるも計られず、殊には今宵の雨催ひ。』
 『何に致せお互ひに、役目を大切。』
 『要心專一。』
 『身をも大事に。』

四人
 『致さうわえ。』
 ト拾臺詞にて上手へ這入る、迹はたくに成り、向ふより船頭鰈六、筒袖腰袋に紺絞りの脚半手甲好みの扮装、是を追ふて天野藤内、胄下に草鞋ばきにて出で、直ぐ本舞臺へかかり、一寸立廻りて、鰈六を引附け。
 藤 『此所は正しく藤戸の渡場。如何に鰈六、最前よりして頼むが如く、人に知らさず海中の、淺瀬々に標を立て、明日合戦の其砌、先渡を爲さむ我が胸中。褒美の金は後として。承諾なして立て呉りやれ。』
 鰈 『褒美の金に成る事故、命に代てやつつけやしやうが、此所が一ツの考物。標は立た、先渡は被爲た、其時萬一討死でも、あなたにやれた其時は、濡手で泡を食ふのは鰈六。』
 藤 『ヤア何を申す、今合戦の前にあたり、不吉の返答無禮者目。』
 鰈 『でも御座りましやうが、先渡なさるも命がけなら、瀬踏をするのも』

命がけ、さう安くは受合れませぬ。

藤 「さほやまでに此藤戸を恐れ、厭だどぬかす上からは、三途の川の瀬踏をさせん。

鯉 「こりやもウたまらぬ。

ト逃げかゝるを引戻し、面白き立廻りありて、度々鯉六上手へ逃げる、藤内追ふて這入る。迹波の音はげしく打込み、打上げになり直ぐ、大薩摩。

上へ 夫。吉備の兒島の浦つゞき。芦間を洩る、篝火の。なげびる方に消え行きて。むらがる雲を吹拂ふ。風に驚く浦千鳥。名残詠ふて。ぱつと散る。今夜源平兩陣は。寂ばくとして聲もなく。寄せては返し返しては。月影碎く大浪の。音のみ高く打響き。恐ろしくも亦。物凄し。

ト一杯にて道具幕切つて落す。

本舞臺一面の平舞臺、向ふ兒島の入江を見たる遠見、ガラス張の片破月、雲のかゝる仕掛あり。真中よき處に鹽俵を積みたる岡、上手につゞきて三間の間、芦疊にて見切り、下手苦音の小屋、此所に藤戸渡しと書きたる木標。波の音を震ませ、物凄き合方になり、向ふより佐々木三郎盛綱、甲冑の上に簑を着、竹皮笠を手に持ち出來り、花道よき處にて留り。

盛 「今まで降りし雨も止み、片破月の影さえて、さらめく芦の枯葉より、立つ浦風の肌寒く、冑濕はず征客の、涙も氷る真夜中に、思ふ兒島の浦づたひ。

ト思入あつて、正面を見渡す事よろしく。

盛 「わづか一葦の海水を、隔てし向ふの海岸に、陣を張りたる平家の軍勢、つひ目の前に見ゆれども、淺瀬を知らぬ悲しさに、彼より毎日戦を、挑むと雖も誰一人、真先に立ちて乗入る者なく、空しく弓を握りつめ、一矢を放たぬ口惜しさ。此儘日數を過しなば、末代までの笑は

れ草、是非ども明日盛綱が、一命此所に捨つる可き時と定めて先渡な
 さむと、思ひし處時もよし、渡守なる浦平が、淺瀬に筐の濡漂、ひそ
 かに立て導かむと、申出しを之幸ひ、敵に知らさず立つる手筈〇今宵
 月の出るを相圖、ひそかに見分致せよと、彼が言ひしが御前にて、翌
 日の軍議に暇を取り、心ならずも遅れたわえ。

ト矢張以前の合方にて本舞臺へかゝり。
 「ちかひし處は渡場の、小屋の前と云ひたりしが、未だ彼の見えざる
 は、如何致せし事なるか

盛 此時声を掻分る音する、盛綱キツと見て。

「誰か人の参る様子、見咎られては面倒なり〇ムウー幸ひなる此小屋
 の、中に這入りて遣過さん。

ト中へ這入る、合方變りて本釣鐘を打込み、是をキツカケに芦疊よ
 り、渡守兒島の浦平、脚半手甲に水に濡れたる心。大童の鬘これ

を鉢巻にて止め、苦を冠り、割ッて片足出し、よろしく見得。直
 ぐ本舞臺へ出。

「今まで此所に佐々木様がお出ありしと思ひしに、御姿見えぬは、
 ト四邊を見廻す。

「其所に参りしは浦平なるか。
 ト小屋より盛綱出る。

「ヲーそれにお出なされましたか。

ト下手へ廻り。

「おほせの如く淺瀬へは、目立ぬ様に筐を立て、更にぬかりは御坐り
 ませぬ。

「まことに太儀であつた、秋とは申せ冬近く、殊には深夜水中へ、入
 りて働く事なれば、さぞや五体が冷えたであらう。

「何是敷に冷えましやうや。年が年中水の上、慣れた体に潮水は、眞

浦

盛

浦

浦

盛

浦

水と違ふてなまぬるく、却つて陸より暖う、身内がはかく致しまする。

盛 「ても天晴勇まし、やがて勝利に相成らば、範頼公に申上げ、武士に取立て得さす可し。

浦 「これと申すも源氏方へ、盡す忠義の先づ手初め、何は兎もあれ盛綱様、瀬踏の様子一通り御見分被下りませ。

盛 「如何様左様致さう。

ト盛綱先きに浦平、鹽俵の重ねたる高二重に上り、見渡す事ある。

此時端が、りにて竹法螺を吹く、盛綱キツとなりて。

盛 「はて心得ぬ。深夜に當り常山の麓に響く法螺ケ音は、敵勢寄する合圖なるか。

浦 「御配慮あるな盛綱様、潮時知する漁村の竹法螺。あれく見ゆる松明は、沙魚を寄する漁船。

ト乘りに成り。

「してく浦平淺瀬の様子、是にてとくく、指示せ。

浦 「御覽候へ砂路より、鷗が騒ぐ一筋の、波のきらめく其所、真直に通りて右に折れ、足守川の瀬に着きて、向ふの松の根に通ふ、これぞ則ち大根の渡し。

盛 「扱又藤戸の渡しと云ふは。

浦 「これぞ今日笹を立て、源氏を導く添漂。藤の蔓を引きたる如く、潮路を分けて浪高く、唯見る時は恐ろしけれど、鶴も翼を濡さずして、安々渡ると昔しより、言傳へたる藤戸の渡し。

盛 「ツム、これにて様子は判然たり。まことに浦平汝無くば、深味に落ちて誤まる可きに、今度の勝利は汝の賜物。

盛 「あれく白鶴芦邊を立ち、雲井遙かに舞上るは。

浦 「どれく何處に。」

ト云ひながら、浦平短刀を抜き、不意に盛綱を刺しにかゝる。驚きながら其手を取りて、盛綱浦平を組敷ながら。

盛 「ヤア血迷ふたか浦平、短刀持ちて何とする。」

浦平これを刃返して二重より飛下り、直ぐ片足を鹽俵にかけて、短刀を持ちたる儘見上る。盛綱刀の鞘に手をかけて見下す。合方キツパリとなり。

浦 「何とするとは知れた事、ばらして仕舞ふ、かねての手筈。」

盛 「すりや又如何なる仔細ありて。汝が居ては合戦の、邪魔になるから殺して呉ると、平家方から依頼を受け、表を包む浦平が、瀬踏に辜寄せわざくと、此濱邊までおびき出し、此所で一命、貫ふ氣だ。」

浦 「思かや浦平、聽し藤戸の渡しより、猶淺墓なる汝の計略。此盛綱が一命を、左程に所望致すなら、随分遣るまい物でもないが、一たん不

浦 意を打損じ、晴れて勝負と相成らば、よも、此首は打たれまじ。

盛 「これが唯の船頭なら、一度あやまり二度目とは、臆意て刀を持たれまいが、すこしは世間に名も知られ、腕に覚えも荒海を、權一本で乗廻す、下は板子の只一枚。常から命を捨てかゝれば、鰐に食れて死ぬるより、ひんやり肩へ太刀魚の、切りさげられても未練はねえ。」

浦 「大膽不敵の渡守、船頭たりとも面白し。其高言に負ぬ様、見事此首取ッて見よ。」

盛 「おんでもない事、盛綱覺悟。何を。二人小癩な。」

ト盛綱二重より飛んで下り、種々面白き立廻りあり。ド、盛綱刀を抜きて切ッてかゝる、浦平以前の苦を持ちて受ける。此見得にて月に雲をかける。これより搜りになり、笛入りの合方に、成りて、ド、盛綱浦平の肩先を切る。浦平だちくと成り、好き所へ

倒れる。盛綱振上げたる儘浦平を見つめる。本釣鐘を打込み、月の雲を取る。これにて床の上瑠璃に成り。

上 切りさげられて浦平は。苦しさ息をホツとつき。

浦平。苦しさ思入あつて。

「やれ待れよ盛綱殿。最期の際に浦平が、申し遣す一儀あり。

「やア一卑怯なり浦平、此期に及びて相待んや。

上 サ、サ、其御詞は道理なり。如何にも卑怯未練なれど。

親の爲めには卑怯と成り。妻子の爲めには。未練も起る。

「慈悲ぢや、情ぢや。盛綱殿。先づ一通り、お聴き被下れ。

「何事か存せねど、仔細ありげな依頼の様子。三郎盛綱承はらん。

「何、お聴被下るとな、忝けなし忝けなし。

ト浦平嬉しき思入あつて。

「御依頼申すは餘の儀にあらず、某此所に相果なば、其死体を人に知

浦 盛 浦 浦 盛 浦

らさず、海の中か但し又、蘆の根なりと苦しからねば、人目にかゝらぬ其所へ、埋めて隠し被下れたし。

盛 「なんと申す。

ト篠笛入りの合方にて。

「何を隠さう浦平も、元は平氏につかへたる、兒島五郎爲久とて、弓矢を取りし身なりしが。

上 戀にはゆるむ習慣とて。過し昔の櫻狩り。廻らす慕の其中に。

「ゆかしと思ひし其人と、逢ふて嬉しき夢の中、日頃互ひに争ひし、

意地悪る男に見附られ。

上 不義はお家の嚴禁と。既に一命召るゝ所。

「行盛様の御情けにて、御助命被下るそれのみか、いづれへなりと落

のびて、晴れて夫婦に成れどのおほせ。若氣の至りの不甲斐なさ、女

の爲めに身をあやまり、家を絶やして居りながら、其場に於て切腹な

す、勇氣は微塵兔の毛程も、なかりし我の膂は。
上へ 腐りはてたる意久地なし。

浦 「母と女と三人にて、落行く先は此兒島。弓矢を捨て持つ權の。
上へ 雫に碎く月影の。

浦 「亂れ勝なる世となりて、此時にこそ身をも立て、絶えたる家を起さばやど、思ひし所時よし、此兒島にて合戦の、始まる由を聽きたる嬉しさ。其儘直ぐに行盛様の、御陣へはせつけ參らんと、勇み立ちては見た物の。

浦 上へ 思へば是ぞと名乗る可き。功名もなくおめくど。御前へ出るもはづかし。

浦 「歸り見參の土産には、源氏方にて強者と、音に響きし盛綱の、首を上げて參らんと、扱こそたくみし瀬踏の一條。はづれしのみか、あまつさへ、其盛綱に切殺され。

上へ 一命果しと聽かれなば。再び家を起す可き。たよりの綱も切れはて。

浦 「さぞ母人が御無念ならむ、甲斐なき奴ぞと御立腹被爲れやう。それにつけても女房子は、やがて出精の出来る事ぞと、喜び勇むで待って居れど。

上へ 水の泡と消えて行く。此有様はしらぬ火の。筑紫の果や、外ヶ濱。昨日は東。今日の日は。何處でどうして居る事かと。

浦 「船にて諸所を廻りても、案じて宅で待つて居るに、此浦平が死体を、見たらば如何に氣を落し、なげき死するや計られず。又二ツには我も亦、昔は平氏の武士なるに、むざく源氏の手にかゝり、死せしと世間へ知られては、末代までの笑はれ草。此所を思ふて盛綱殿。御介錯の其上は、死体隠して被下たし。

上へ 言ふも苦しさ。聽くつらさ。盛綱漸く面を上げ。

盛

ト浦平苦しき思入れ、盛綱歎息の思入れありて。

「初めて聴きし貴殿の素性、扱は平氏の兒島五郎爲久殿でありたりしか。斯く承はる上からは、お心安かれ爲久殿、キツと死体隠し申さむ。又迹々の其所も、必ず悪くは致さねば、心遣さず定佛あれ。」

浦盛

「それ聴いて先は安堵、かへすくも盛綱殿。」

ト盛綱浦平のよわりしを見て、不憫たど云ふ思入れあり。耳元に寄り。

浦盛

「佐々木三郎盛綱が、命に代へても引受申した。」

「ふム、難有き其御詞、さらば彼の世へ。」

ト此時遠寄せを打込む。

二人 出陣の。

上 生死は茲に二筋の。大根藤戸の渡し舟。

盛綱

ト名残を惜しむ氣味合ありて、ト浦平短刀を腹へ突立て。此所へ以前の鰐六、窺ひ出。

「こりや浦平を。」

ト盛綱へかゝる。盛綱鰐六の襟髪を取りながら。

「惜しき勇士を。」

「何をツ。」

ト又かゝるを見事に投げる。浦平短刀を引廻し、ガツくり落入る。

上 沈み行くこそ。

ト盛綱鰐六をおさへし憊悲しきこなしにて、片手にて拜む。此模様よろしく三重にて幕

○下の巻 兒島宅盛綱物語の場

本舞臺三間の間常足の二重。薬家根竹の本椽。正面一間の間破障子を

立ち切り、出這入りあり。此上手一間上三尺佛壇を仕込み、下板戸の二枚引。下の方一間鼠の破れ壁。二重よろしき所に圍爐を切り、古びたる自在竹に茶釜を掛け、傍に茶盆、薪木を入れたる籠なぞあり。いつもの所粗朶垣をあしらひ、竹簀戸の門口。上手笹の植込にて見切り。下手兒島の海面を見たる遠見、都て藤戸村浦平宅の体。此所に漁師の沖野、倉井、白帆、世話女房結髪にて、二重に腰を掛けて居る。浦平母小巻白髪鬘、世話姿好みの拵へにて、三人へ茶を出して居る。船頭歌に波の音を冠せ幕明く。

「まア皆さん、お茶一ツあがりませ。今方隣家の内から貰ふた、麥こがしなどあげまじやう。

「これは婆様、もう構ふて被下るなや。まだこれから用もあれば、うかく遊んでは居られぬ故。又今度にして被下れや。

「今日は地網の網元へ行て、太網打つた歸りがけあまり無沙汰仕まし

たから、それで一寸寄つたばかり。

「變らず此方の尾花さんは、勢出して網糸つむぎなさんすか。

「手惜ぬ仕事も皆さんに、教えて貰ふた甲斐が見え、此頃ではどうやらかうやら、縁が揃ふて來ましたわいの。

「それは誠に結構ぢや。妾達の様な鈍な者では、なか／＼おぼえるのに苦勞を仕たが。

「元が都そだちの尾花さん、縫仕事なら、機織なら、なんでも心得て居なさるから。

「わッけもなく飲込めるか。さても／＼浦山しい事ぢやなア。

「して今日は尾花さんも、曾根松坊も此所に見えぬか。

「二人で何處ぞへ。

「行かしやんしたか。

「さればいの皆さん聽いて被下れ、どうした事か浦平は、三日前に沖

合あひにて、源げん氏じ方がたと平へい氏り方がたと、合かっ戦せんありし其その時ときから、何どこ處こへ行いつたか行ゆ方かた知しれず。仲なか間まの衆しゅうの噂うはさには、源げん氏じ方がたの武ぶ士しに、引ひ立たられて無む理り無む体たいに、軍いく船さふねの船ふなこ子こにされ、西にしの國くにへ行いつたとやら。それ故ゆゑ藤ふじ戸との渡わた船ふね向むかふへ渡わたす者ものもなく仕し様やう事ことなしに尾お花はなと曾そ根ね松まつ、朝あさから渡わた場ばへ行いつ居をつたが、今いまに歸かへつて來きませぬわいなア。

沖おき倉くら白しろ 「それでは浦うら平へい殿のが居かやらぬので、尾お花はなさんと曾そ根ね松まつ坊ぼうが。

沖おき倉くら白しろ 「其その代かりに行いかしてやつたとか、それはくゝ大たい体ていの事ことぢやない。

沖おき倉くら白しろ 「したが此こ方ちの浦うら平へい殿のも、源げん氏じ方がたの船ふなこ子こになつて、西にしの國くにへ行いかしてや

沖おき倉くら白しろ 三人さんにん 「褒ほう美びの金かねをたんまり貰もらふて、今いまに歸かへつて來きなさらう。

沖おき倉くら白しろ 「それを思おもふて少すこの内うち、淋さびしからうが辛しん抱ぼうして、待まつて居かたが。

沖おき倉くら白しろ 「よいわいのう。

沖おき倉くら白しろ 「それがモ一ま誠まことなら、彼かれが出しゅつ勢せに成なる事こと故ゆゑ、いつまでも待まつて居かやう

が。

ト思おも入いれありて。

沖おき倉くら白しろ 「萬ま一いつ源げん氏じ方がたが負まけになり、其その船ふねが沈しづみでも仕した時ときは、褒ほう美び所ところぢやないわいの。

沖おき倉くら白しろ 「これは仕したり婆ば様さま、當たう時じ日ひの出での源げん氏じ方がた。

沖おき倉くら白しろ 「其その様やうな事ことはないわいな。

沖おき倉くら白しろ 「さう云いふて被く下くだると、とやうやら氣きが落お着ちくけれとな、つひいろくど深かふ考かんへ、夜よの目めも碌ろくに合あひませぬ。

沖おき倉くら白しろ 「くよくよく何なにも思おもはぬがよいぞへ。果くわ報ほうは寢ねて待まてとやら。最も早はや彼かれ甚こ夕ゆう方がたぢや。

沖おき倉くら白しろ 「内の宿やど六むが寢ねて待まつて居かやう、士み産やに酒さけの果くわ報ほうをさげて。

沖おき倉くら白しろ 「とややおいとまと仕し様やうかへ。

沖おき倉くら白しろ 「皆さんそれでは行いかんすか。

卷

沖おき倉くら白しろ 「萬ま一いつ源げん氏じ方がたが負まけになり、其その船ふねが沈しづみでも仕した時ときは、褒ほう美び所ところぢやないわいの。

沖おき倉くら白しろ 「これは仕したり婆ば様さま、當たう時じ日ひの出での源げん氏じ方がた。

沖おき倉くら白しろ 「其その様やうな事ことはないわいな。

沖おき倉くら白しろ 「さう云いふて被く下くだると、とやうやら氣きが落お着ちくけれとな、つひいろくど深かふ考かんへ、夜よの目めも碌ろくに合あひませぬ。

沖おき倉くら白しろ 「くよくよく何なにも思おもはぬがよいぞへ。果くわ報ほうは寢ねて待まてとやら。最も早はや彼かれ甚こ夕ゆう方がたぢや。

沖おき倉くら白しろ 「内の宿やど六むが寢ねて待まつて居かやう、士み産やに酒さけの果くわ報ほうをさげて。

沖おき倉くら白しろ 「とややおいとまと仕し様やうかへ。

沖おき倉くら白しろ 「皆さんそれでは行いかんすか。

三人 「そんなら婆様。

卷 「皆の人。

三人 「大さにお邪魔を致しました。

ト右の鳴物にて門口へ出、捨臺詞にて下手へ這入る。小巻見送りて。

卷

「よくしやべる人達ぢや。それはさうと孫や嫁女は、まだ歸ッて來居らぬが、道で事でもありはせぬか。軍のあつた迹故に、人の心も荒立ちて、どんな事が出来るや知れず〇ア、心にかゝる事ぢやなア。

ト向ふを見る事ありて。

卷

「兎や角云ふ内、はや夕暮、どりや燈明などつけませやう。

ト門口を締て二重へあがる、迹時の鐘打上、床の上るりに成る。

上 へ あはれなり。海士が伏屋に立のぼる。烟も迷ふ夕間暮。我が子の行衛兎や角と。小巻は一人打案じ。

卷

ト燈火をつけながら種々思入ありて。

「御歸參願ふ其前に、一ツの功を立てると言ひて三日前に出たそれぎり、今に歸ッて來ぬを見れば、仕殞じたに相違あるまい。それにしても其事が、世間に知れぬ所を見れば、もしや其儘平氏方へ、加はり申して戦に出、西國へでも落ちて行つたか。何にせよ浦平が、無事のたよりを聴きたい物ぢやなア。

ト圍爐に向ひ薪木を燃しにかゝる。

上 へ 燃ゆる圍爐の其火影。目當に歸る母と子が。權にかけたる腰篋の。

濕り勝なる秋の夕。

ト向ふより浦平女房尾花、世話女房結髪、好みの拵えにて、權に腰篋を結びつけ、男々しき女船頭の姿。浦平一子曾根松、前髪鬘後る茶筌、同じく子船頭の拵えにて、尾花に手を引かれながら出來り、兩人花道へ留まり。

花 曾 花

「これ曾根松、最前拾ふた短刀を、一寸出して見せやいのう。」
「砂路で拾ふた短刀かへ。」

「おうそれく。一寸出して見せてたも。」

「アイ、あい。」

上「あいとばかりに差出す。其短刀を取あげて。見やる尾花は目に持

つ涙。合點行かじと曾根松か。

ト尾花短刀を受取りて、其身を見ながら悲しき思入ある。曾根松不

思儀な思入にて。

花 曾

「母様、最前拾ふた其時に、父様の短刀ぢやと、私が言ふたら左様で

はないと、お前は呵らしやんしたが、私やどうしても左様思はれる。

「ア、好く氣が付きやツた。如何にも此短刀は父様の物なれど、それ

ぞどあの場で言ふたなら、渡を越る人達に、聴かれて不思議に思はれ

やうと、それでわざと呵ツたのぢやわいの。」

花 曾

「それでは矢張父様のか、それがどうして砂原に。」

「さ、心にかゝるは此事。もし打殞じても被爲れたか。」

「エ、え、えッ。」

「いえさ、まだ何とも分らぬ故、確かな事も言はれねば、兎も角も婆

様には、何も隠して言やるなや。」

「私は何んにも言ひませぬ。」
「ア、賢い子ぢや。○兎云ふ内手間取れた、さぞ婆様が案じてゐる、

サア早ふ歸りませう。」

「それでは母様。」

「曾根松おぢや。」
ト短刀を曾根松に渡して懐中に入れさせ、手を取りて。

上「ひくや子の手の杖はしら。いそぎてこそは立歸る。」

ト本舞臺へかゝり、門口を明けて這入り。

花 曾 花 曾 花 曾 花 曾

「曾根松おぢや。」

ト短刀を曾根松に渡して懐中に入れさせ、手を取りて。

上「ひくや子の手の杖はしら。いそぎてこそは立歸る。」

ト本舞臺へかゝり、門口を明けて這入り。

曾

花

卷

花

「婆様只今歸りました。」

「大きにおそなはりました、さぞお淋しう御座んしたらう。」

「オ、孫も嫁女も歸ッて来やツたか、今日は常より歸りが遅さに、さつう案じて居ましたわいの。」

「左様で御坐りましたか、今まで戦で止ッて居た、渡場が開けたので、日ましに往來が多うなり、それで遅くなりました。」

ト臺詞の中に權に着けし腰篋を解きなと種々ある。此内前幕の鍛六漁師常着の拵えにて門口に來り、立留りて様子を伺ふ事ある。

「さぞ、草臥やツたであらう、早う休んだがよい。曾根松の着物は妾が着かへさして遣る程に、サーちやツと奥へおぢや。」

曾

卷

上

「あいと云へど。立兼る。様子知らねば小卷は急立て。」

ト曾根松は懐中の短刀に氣を置きて立兼る、尾花も心配の思入れ。

卷

花

「はて曾根松、なせ来やらぬ。婆の言ふ事を聴きやらぬか。」

トキツと云ふ。尾花も是非なく。

「これは仕たり如何した物ぢや、婆様のおツしやる通り、早う奥へ行て、着かへさして貰やいの。それとも亦、其方も大きうなりやツたか、一人で着かへるとも、な、それ早う着物を〇えエ、も鈍な子ではあるわいの。」

「あい、それでは、一人で着かへましやう。」

「それならば着物など、とれ出してやりましやう。」

上へ是非なく奥へ入りける。迹に尾花は唯一人。物思はじと思へ

ども。夫の行衛氣に懸かり。

ト曾根松小卷二重へ上り、障子の内へ入る、迹に尾花のこりてゐる

くこなしあツて。

「最前拾ふた短刀と云ひ、昨夜からの夢見と云ひ、こりやてツさり浦

花

「最前拾ふた短刀と云ひ、昨夜からの夢見と云ひ、こりやてツさり浦

平殿は、打損じて生擒れ、源氏の奴原が刃にかゝり、殺されども被爲れたか、イヤ／＼それなれば其様な、噂がなければならぬ筈、無事で居てか、平氏方に従ふて西國へ落のびてか、いづれにしてもそのたよりが、早う聴きたい物ぢやなア。

「アイ尾花さん、其たよりを、小生が聴いてあげやせう。」

ト門口より聲をかける。

「さう云ふ聲は。」

「誰でもねえ、鰻六だ。」

ト門口より這入り、直ぐ二重へ通り、圍爐裏の傍に胡座をかき、薪木なぞくべる事ある。

花

「誰かと思へば鰻六殿、夫のたよりを知つてとあれば、早う聴せて被下んせ。」

ト二重圍爐裏の向ふへ住ふ。

鰻

「これさ尾花さん、戀男のたよりぢやて、其様にそわ／＼する事はないわえ。まアゆつくりと聴くがよいわ。」

花

「これがそわ／＼せずに居られやうか、人じらしな鰻六どの。」

鰻

「アツと待った人じらしとは、これさ、尾花さん。お前の事を云ふのぢや。」

花

「何んと云はしやんす。」

鰻

「はてさ、眞面目で問はれて話すのは、大きに野暮の至りだが、何を隠さう尾花さん、小生はお前にホの字ぢや、ホの字ぢや。」

花

「これはまア何事ぞいな、其様な事はたづねはせぬ、夫浦平は如何したか、それを問ふて居るのぢやわいなア。」

鰻

「眞實問ふ氣なら話もしやうが、言ふた後では、な、これ尾花さん、情好い返事を。」

ト尾花の袖を取りて。

「聴かして被下い。」

「何を仕なさんす、串戯にも程がある。」

「串戯所か大眞實。」

「眞實ならばゆるさぬぞへ。浦平と云ふ歴とした妾にや亭主があるわいなア。」

「さア其亭主が無い故に、それで仕かけた此戀を、厭だと言へばモウそれぎり。」

ト立かゝる、其袖を取りて。

「心掛りな今の言葉、亭主がないとは浦平殿が、死んだとでも云ふ様な。」

「言ふ様な所か浦平は、遠づくに此世を南無阿彌陀佛、水葬禮で龍宮で、鮫の腹でも肥して居やうよ。」

「えッ。」

ト驚く事ある。

「アツと、大事な秘密をうかゝ口走ツた、成程戀は癖者だ、とれ、尻の割れねエ其内に、おいとまと仕やうかへ。」

ト二重より下りて行きかける、尾花おはて、留めながら。

「これ鰈六殿、今の言葉が信實なら、どうぞ誠を打明けて、くわしく聽せて被下さんせ。」

「いやだゝ當もないのに話してしまひ、迹でおどゝらお出と云ふのは、世間で此頃流行るさうだ。」

「そりやどうあつても言はしやんせぬか。ト前へ廻りて留める。鰈六其顔をつくぐと見て、ほれぐとな

り。

「アツと言ふてしまはうか。」

「言ふて被下さんすか。」

鯉花鯉

「言ふまいか。」

「言はしやんせぬか。」

「えい、も、一思ひに。」

ト尾花に抱きつく、之を拂ッて逃る、追ふて帯を解く事などいゝる
くある。此内上手の藪壘より、浦平弟濱六、總髮鬘茶筌齧、
旅装束好みの拵え、手に竹皮笠を持ち、すか〜と本舞臺にかゝり、
鯉六を投げる。

鯉

鯉六投げられたる儘、腰をさすりて痛み思入れ。

「わいた〜、〜、ても手酷い奴では有ぞ。今一息と言ふ處で、大願
成就になる物を、すでんころりと投げ居ったは、尾花が腕では及ばぬ
事、定めて男子に相違あるまい。誰ぢや〜、名を名乗れ、名をさか
せ。」

ト起きあがりて濱六にかゝる、濱六竹皮笠にて矢張面をかくし、尾

濱

花を後にかくまひながら。

「汝等如き奴原に、名乗ッて聴かせる我でなし。却ッて此方に僉議も

あれば、其所一寸も動かぬ様、兩手をついて待ッて居れ。

「ヤ、此奴が〜、戦争で人氣が荒くなり、高言吐くのが流行ぢやて

、あまり度外の今の詞、其舌抜いて以後の誠め。」

ト濱六にかゝる、濱六竹皮笠にて鯉六の頭を打つ。たぢ〜とこな

り。

「ヤ、ヤ、ヤ、通りかゝりの旅人と、思ひの他の立派な武士。」

ト驚きながら、よく〜見て。

「藤戸の渡しで盛綱に、切殺されたと思ッたが、汝、浦平、いつの間

に、此世へ生て歸ッて来たし。」

「何、浦平殿は渡場で、佐々木盛綱に殺されしとぞな。」

「なんの事やら、一向分らぬ。それでは汝は浦平では……。」

花 濱

「我は浦平が弟にて、兒島濱六と言ふ者だ。

「扱は噂にさゝりました、夫の弟御濱六殿とは、あなたの事で御座りま
したか。

茲へ奥より小巻と曾根松走り出。

「なに、浦平が歸りしとな。

「ヤツ、父様か。

卷 曾 卷

ト絶りて氣のつき、曾根松と小巻と入代り。

「聲がよく似て居る故に、浦平かと思ツたが、めづらしや、其方は濱
六。

卷 濱 卷

「誠にあなたは母上様、先は御無事で。

「其方も健固で。

濱 卷 濱

「大慶に御座りまする。
ト互に無事を喜び合ふ。

鰻

「それでは矢ッ張、浦平は。

ト言ひかけ氣がつきて。

鰻

「かう何も彼もばれ出しては、長居はおそれ、とれお先へ。

ト門口へ行きかける。

濱 鰻 濱

「汝を逃してよい物か、訊ふ事あれば暫らく待て。

「いや又、後にヤツて来る。

「なぞと其手でのがすべき。

ト鰻六を引つけ。

濱

「最前汝が言ひたる如く、兄浦平は渡場にて、盛綱の手に殺されたり

とは、眞實か又偽言か、さア眞直ぐに言ふてしまへ。

鰻

「此大力につかまつては、兎ても隠せぬ一部始終、すツかり白状する

上は、命ばかりは免して被下れ。

濱

「取ツて益なき汝が一命、如何にもゆるしてつかはす程に、さア早く

此所で申せ。

「口外すなど盛綱から、たんまり金子を貰ったが、命が惜しさに言うてのける。最前小口を切った通り、三日前の夜の事、此方の浦平か殺されて、砂原に倒れて死んで居る處へ、丁度我が行きかゝり、すんでに我もやられる處、金子を貰ふて其死体を、海の中へ投こんで思はぬ儲にありついたわ。」

「さては、アノ盛綱奴が。」

「不憫や息子浦平を。」

「切殺したとは誠かいなア。」

ト皆々顔見合せてなげく事ある。

「それではアノ父さまを、盛綱と言ふ武士が、殺したのかや。」

「をいのう。」

「ハア——。」

濱 卷 花 曾

曾

ト泣き伏す、尾花いたはる事ある。

「父さまが出て行かしゃんす時、やがて出世をしたならば、立派な刀

をさしせると言はしやツたが、それでは武士には、なれぬのかいな

ア、立派な刀はさせぬのかいなア。

「望の綱は切れたわいのウ。」

「たとへ父さまは盛綱とやらを、打損じて殺されて、元の武士にはな

れずとも、これから私が力にて。」

ト前の短刀を出し。

「これで、父さまの怨をはらし、一人で出世をする程に、祖母様も、

母様も、必ずなげいて被下るな。」

「誠に勇ましき其詞、如何にも親の耻辱を雪ぎ、立派な武士に相成れ

よ。及ばすながら此叔父が、いづくまでも力を副へん、それにつけて

も残念なは、屋島よりして濱六が、四五日早く來合せなば、兄と心を

濱 曾

曾 卷

共にして、むざ／＼遅れを取るまじき。そのみならず屋島より、行盛卿に渡すべき、軍略しるせる書状まで、合戦ありし當日の、間に逢はざりし口惜しさ。

ト濱六口惜しき思入れ。此内鰐六すきを見て門口へ出で、一さんに上手へ這入る。

「やッあれ／＼濱六、鰐六奴か逃出したわいの。」

「何鰐六を、取逃したか。」

「迹を追ッて参りましやう。」

「イヤ今から追ふても詮ない事、打捨てお置きなされ。何程の事致さ

んや、それよりは少しも早く、浦平殿の死体を、海中よりさがし出し、

葬式出した其迹で、敵盛綱か後陣を引受、まだ出立をせぬぞ幸ひ。

「夫の遺恨。」

「父の仇。」

濱花濱卷

曾花

濱 四人 「やはか晴さで。」

「置くべきか。」

上へ立あかりたる其時しも。一間の内に聲ありて。

ト皆々立あがる。

盛 「やれまて暫し此家の人々、外へ行かる、までもなし、佐々木三郎盛

綱が、それへ参ッて對面せん。

ト前幕の佐々木盛綱、立茶筌鬘、甲冑好みの拵えにて、一間より出

る。これにて濱六二重にかけあがり、尾花、小卷、曾根松、皆々

キツと成り。

濱 「珍らしや佐々木三郎、名乗出しこそ神妙なれ、兄浦平が無念の最期

も、汝が及にかゝると聴く。」

花 卷 「年は取りても一念は、我子の仇を打たんため。」

「これより共に迹を追ひ、勝負をなさんとおもひしところ。」

曾 演 「此家に來たが天の恵み。
遺恨の刃を。」

四人 「受けて見よ。」

盛 「はやまり給ふな方々、之には仔細のある事なり、心を静めて盛綱が、
語るを聞いた其後で、打ちも打たれもする所存、しばしの猶豫をなし
給へ。」

濱 卷 「此期に及んで卑怯至極。」

曾 卷 「未練であらう佐々木三郎。」

四人 「急いで勝負の。」

盛 四人 「身支度致せ。」

「これ程待てと申しても、聴かぬとあれば是非もなし、兒島五郎爲久
が一家の人々、いざや勝負を致すであらう。」

四人 「やアツ。」

濱 卷 花 盛 「兒島五郎爲久と、兄の實名知りたるは、
合點の行かぬ三郎盛綱。
「どうやら仔細のありさうな。」

「別に仔細もなき事なり、花の三月櫻狩、霞の幕に包まれて、散ぎは
脆き武士の、果は備前の荒磯に、表を包む浦平とは、平家方につかへ
たる、爲久殿の行末と、知らで打ちたる此盛綱。其場の様子あらまし
を。」

上 物語らんと乗出しの。

ト床の上るりに合せ。

盛 「抑も其日の合戦は、只兩岸に陣を張り、睨み合ひにて居たりしが。

上 浅瀬を知らぬ悲しさに。平氏方より浦風の。たよりに寄せて呼は

る聲。

「ア、ア、ア、アと招かれても、誰乗出す者もなく、其儘其日を過せ

し處。藤戸の浦の渡し守、浦平と名乗出で、瀬踏のしるし立てんと云ふ。これ幸ひと夜にまぎれ、見分なさんと行き見れば。

上へ 思ひもよらぬ後より。切入る刃打落し。

ト濱六をつかひ、種々ふりある。

盛 「抑も何故の刃傷ぞと、聴けば答ゆる詞の中、平氏方の頼みを受け、此盛綱を刺んず覺悟。さては誠の船頭が、慾につられて爲すわざと、腹立しさに切りさげしが、いまはの際の懺悔話。

上へ 聴けば平家の落人ど。語るもつらきだんまつま。

盛 「人死する時は其詞よしとやら、武士たる物のはずべき手段と、さてッて我へ頼む一言。何卒此儘海中か、但しは砂路か芦原へ、亡体隠して又共に、ありし次第を人に語るな、家内の者に知らし吳など、言はれて見れば、我も武士。扱こそ今日まで包みし次第。

上へ かくの次第と物語れば。はじめ聴し其場の有様。これはくくと

人々が。顔を見合すばかりなり。

ト皆々今更手出ししがぬるこなし。

盛 「かく打明し上からは、最早や言ふべき事はなし、いざ首打と、サ、云ふべきなれど、私ならぬ今の身は、後陣を守る大事な役目、日出度く西國より歸るまで、我が一命を我に又、あづけて吳よ方々。

上へ と頼む詞に。濱六は。抜きし刃も涙に曇り、其儘とッて打伏して。

濱 「これ兄者人、何故武士らしく名乗を上げ、立派に勝負を仕給はざりし。弟の身にて兄の非を、今更言ふも如何なれど、元來女々しい心から、身をやつしたる渡し守、兒島の家の耻辱で御座る。

花 「それと申すも妾から、皆んな起つた事と思へば、合せる顔も御座りませぬ。

曾 「それなら父様の敵打は、モウやめにしたのかや。

濱 「いや、敵打ちは止めにはせぬ、渡し守浦平が仇、佐々木三郎盛綱覺

悟。

上へ盛綱覺悟と呼はりつゝ、片方の藪の竹切り取り。

瀨踏に立たる滯漂、小笹に通ふ佐々木三郎、此竹藪の笹の葉を、思ひの儘に切りさいなみ。

「これにて思ひを。」

「晴しましやう。」

「天晴面白き其仇討、晋の豫讓の故事も。」

「今新しく弓取の。」

「引くに引かれぬ。」

「此場のをさまり。」

「又再會は壇の浦。」

「其時こそは名乗出で。」

「立派に打たる、其覺悟、先それまでは。」

盛 會 盛 花 卷 濱 盛 花 卷

欠

MISSING

い、鼻筋の正しく、口元に力のある、眉毛の濃い、蓬頭櫛らざる如き若者は、たしかに此露石である。

今浮洲に急所を衝かれて、少しくたぢろひた露石は、これを又受けかへすだけの順序を踏まずに、突然袂の中から寫真を一葉取出して、浮洲の前に突付けながら『これを畫いて被下い、これを此通りに畫いて被下い、これよりも最少美しい肖像を畫いて被下い』と急つた、否、急つたのでは無、常人にはこれが普通の歩調であるのだ。

浮洲は手に持つて居るパイプの置處に困つて、四邊を見廻はして、漸く石像の獅子の臺を見立て、其所へ置かうとしたが、巻烟草の先きに灰が溜つて居るので、一寸拂つて、それから放した。

其間の長いので、寫真を突付けた露石の手先はぶるぶると震へて居る。『ぞいお見せなさい』と漸く受取つた浮洲は、其寫真を見るに法ありと言ふ舉動で見詰めて居たが『これが戀愛小説家の本尊ですか、成るほど

美しい女だね』と言つて、又光線を受けかへて見詰めて居る。

『いや美しいか、美しくないかを、貴郎に評されては溜りません、屹度前には賞めて置いて、後からの攻撃が大變だから』『いや今日は悪口は言ひません、如何して〜此娘は實に美しいです、此鼻筋が好い、線が斯う通つて居るわんばい、珍らしいです、モデルには持つて来い。眼が又好いな、惜しいかなチト凄いい、恐らくは此凄いいのは寫眞を撮るのだなと思つて氣を締めた所爲かも知れぬが、あらずんば此人常に愁多く、境遇自から其相を作るといふやうな事で………けれども實物は此眼が身上でせう、ちよいと睨まれたら如何な鑽石も鎔けませう、違ひますか、露石先生』と言つた。

『如何も左様冷かされては困るです。其寫眞を返して被下し、最う畫いて貰はなくつても好う御座んす』と露石は手を出した。

『それが氣が急い、まアお待ちなさい、畫かないとは言ひません、是非

畫かして貰ひたい位です。如何して〜一寸無いね此程の美人は。これを題にしてバツクグラウンドに恰好御眺へのがあるのです。此顔をね、少し上へ向かして、或物を見て居るのです、賤女が籠を小脇に抱へてね、居る處に居るのです。それに後が好いつもりだ、斯うです、枯草が繁つて居てね、其中に埋もれた様な石地藏を見せて、それから、ちらり、ちらり、と若草の新芽をあしらつて、それに、乙女が見詰めて居る點にね、枯枝を出してね、此所が自慢だ、此枯枝に藪竿が二三本張つてある。それへ小鳥が引懸つてね、羽根をばたくさせながらぶら下つて居るといふのです。如何です、好いぢやアありませんか、これを私が畫いて貴郎に上げませう』『左うして被下れば實に難有い。申分はありませんよ、私はどんなに嬉しいか知れませんが、それを大事に掛けて樂しみます』『だが貴郎が白状仕なければいけない、此女に關しての報告が無ければいけない。世間では情話賃におどらして置いてから聴く

のが法だが、此方で繪を書いて上げるかはりに、先さへお情話を聴くな
 なんて、は、ちと變則ですわね」と畫伯は笑つた。奥齒の欠けて居る
 のが悉く此時に見られる、變愛小説家は大きいに熱して來た、蒼白の顔が
 薄赤くなつて、濃い眉毛が微々と動きながら「語る程の事は無いです、
 文學者の頭腦は恐ろしく發達して居るので、社會の現時の或る定度から
 は必らず上位に進んで居るものです、殊に戀は餘程進んで居ます。又こ
 れが進んで居なければ、文學者たるの資格は無いのです。先づ釣竿の糸
 です、好しや、其釣針は重鉛の爲めに水の底まで下つて居やうとも、其
 浮標ですな、常に水面に漂ふて居なければ成らぬ、深ければ深いだけ浮
 標は高くなければ成らぬです、と同じ様に、文學者は社會より餘程發達
 して居る頭を持つて居らねばならない、否、發達の極度に居て、それま
 でに及ぶ様に社會を導かねばならないです。だから、それ、美といふも
 のも其完全なる處を直覺して、それに何物をも引付けて鑄替へさうとす

るのではありませんか。ですもの、其頭腦で描いた理想の佳人、これを
 現時の社會に求めたつて、得られないのは論なしです。有つたら其文學
 者の資格が欠けて居て、美の浮標が低いのか、でなくば其女が文學者の
 資格の備はつて居るので、先づ異例と言はなければ成らんです。それ、
 其所です、文學者に理想の戀は有つても、實際の戀はありませぬ」「故
 に此寫眞は何んでも有りませぬ、と、斯う仰有るのですね」「随つて情
 話るにもろけ様が御座いませんと申します」「では此肖像を私は畫
 くのは御免蒙りますと申します」「それでは困るでは有りませぬ
 か」「それなら御隠しあるばさらしないで、仰言なされまし、は、は、」
 と又奥齒の奥を見せた。

(二二)

「如何も苛めては困りますな。何んで私が其女に戀して居ませう、全く

何んとも思つては居ないです。前にも辯解しましたが、理想で描いた通りの妻を得る事の出来ないのは、文學者の常です、好しや此女の外面が美しいからと言つて、決して内心までは其通りでは有りませんさうけれども、遇々其外面が幾分か理想の妻に似て居るものですから、それで私は其外面だけを愛するのです。寫眞を今一段進んで其油畫を、如何です、私は今貴郎に此寫眞の女の親と成つて貰つて、貴郎の娘の油畫の美人と結婚したいつもりなのです、で、御願ひに來たのです、畫いて被下い、最う冷かすのは止して』『よろしい、私は親と成つて其寫眞の美人を貴郎の嫁に上げませう。此女の名は何んと言ひす』『ま困りますなア、名ですか』『名は何んと言ひますな』『如何も困りますな、阿賤とか言ひましたよ』『阿賤とか言ひますか、それで住居は』『それを聽いて如何するのです』『これから私が行つて、談判して、貴郎の處へよこす様に漕付けるのです』『ア、違つた、然うでは無いのです、貴郎が此寫眞を油

畫に直して被下れば、それが貴郎の娘分にして私の處へ嫁に被下るのと同じです……』『それは分つとる、ちやんと分つて居るのですが、貴郎の方が分らないね、何故ならば、私の考へでは、理想で樂しむといふ戀愛詩人ならば、外面が理想に叶つて居る女を油畫で見ると必要が無い。油畫を見て楽しんで居るよりは、油畫の活きて居る實物を傍に置いた方がいくら好いか知れませんな。實際の醜は見ないでも濟む、理想で實際を美に見て置けば濟むではありませんか、詩人は何も雪を雪と見るにも及ばず、雪を雨の氷つた冷めたくて解ける物と解剖するにも及ばず、雪を花と見ても鷺毛と見ても綿と見ても鹽と見ても、御勝手ぢやアありませんか。それは最う貴郎の仰有る通り、自分の思つて居るのど少しも違はぬ女房を得たりとする事の出来ないのは、當前の話で、それが有つたら不思議なのです。だから大概のところで我慢して、貰つて仕まふ事です、私なんざア矢張貴郎の言ふ様な事を言つて強情を張つたものです。

けれどね、貰つて見れば然うでもない。婢は白色の如しで、先づ第一にパレットに塗るのは是だ。クリムスンでも、エーローでも、イタリヤンピンクでも、インヂヤンレッドでも、望む儘の色に配合が出来ます。女の子を教育するのを両親だと思ふと違ひますな、全く良人にあるです、私なんざア教育仕そなつたから彼の通りですが、貴郎なんざア充分に理想の焼錢を當て御覽なさい、如何な縮れツ毛も直りますよ』

『それが直るやうなら好いのですが、私の力は迎も及びません、斯うなれば言ひますが』と、それは何故ですと浮洲から問ふのを待たずに切出した『實に此女は偏屈ですよ、これも境遇からだとは思つて居ますが、驚くばかり偏屈です』『いよく本題に入りましたね。お待ちなさい、それを承はるには此畫室では不適當ですね』『それぢやア何處かへ行きますせうか』『此女の居る處は如何です』『此女の居る處と言つたつて、其所へは……』『何、行かれない事があるもんですか、此寫眞を見て

も大概分るではありませんか。白人で無い事は明かなりで』『いゝえ全くの生娘……』『馬鹿な此期に及んで。如何に姿を包めども、包み切れぬ點無きにあらず、けれど娼妓でも無いが、藝者でも無し、お茶屋の女中でも有るまいし』『それは分りますまい、苦しがつて銘酒屋の女中などはいけませんよ』『如何も分らないね、何者です』

これが浮洲ならば、此問ひに手安くは答へないが、露石は直ぐと『これは九段坂上の玉突場のゲーム取りを仕て居るのです』と答へて仕まつた。

『それ見給へ、何も彼も發れたでは有りませんか。さア〜其所へ行きませう』『だつて其所では、話なんざア出来ませんよ』『なに其所まで行く間、話しながら歩くのです、いくら話が込入つて居ても、此所から九段まで歩く間には、聽終るでせう。そして寫眞の實物を拜しやうぢやアありませんか』

(一一一)

九段坂上の蹴月軒といふ玉突場、此所には一東軒の佛蘭西菊の頭が恰も玉の様にいつもごろ／＼として居る。香水の香と巻烟草の烟は、絶えた事はない。二個の臺おの／＼の周圍を何か彼か言草を吐きながら、キユウを手にして廻はつて居る紳士、キョウクをキユウの先きに擦る音と共に齒の浮くのは是だ。怪し氣なる油繪の額が懸けてある下には、御關所の正面といふ風でキユウが澤山並べてある。それにつ／＼壁に算盤の様な數取標がある。其所には椅子に腰を掛けて十七八の顔の赤い髪と赤い鼻と頬との殊に赤い娘が、赤い臺がけを掛けて島田に結んで居る。これは第一號のゲーム取だ。

第二號のゲーム取は、他の臺に近い處に居る。それは八九歳の坊主頭の子供だ。椅子に腰を掛けては足が下へ達せぬものだから、椅子の上へ坐つて、彈きの細い棒を持つて『六ゲーム、四ゲーム』などと言ひながら、白と黒との球を當るに随ふて彈いて居る。此方には勝負を待つて居る連中が二三人、テーブルを圍んで雑談をして居る。今まで遣つて汗に成つた男は、息も次がずにラム子を飲んで居る。碁と同じで、見て居る岡目が連りに助言をする『其球は、君、此方から大廻しに遣らなければいかん』『いや／＼駄目だと思つて引いて見給へ』『處が引くに引かれぬ男の意地で』『男の意地でミツセスをミスに爲るのが落ちたらう』『ませちやアいけない、キユウが動くから』『動かないのも困る奴さ』など、姦しい事だ。此所の主婦と見えて、蓬が白けた様な眉毛を残して居る四十以上の女、十代から横濱で洋妾を仕て居たが、料理人と出來て、合の子の娘を置去

りに駈落を仕たといふ履歴があるらしいえら物。それが連りに待合せて居る客に御世辭を振時いて居る。そしてチヨイ〜と臺の上の球に眼を配つて『おや〜〇〇さん、血迷ひましたね、そんな突き方ぢやア昔の兩國へ行つても、やれ突けそりや突けへは這入れませぬね』と冷かす。随分失敬な言葉だが、それでも御客はげら〜笑ひながら『ほんとに然うだね』と受けて居る。

此主婦の鋭い目が、きらり、ときらめいた時に、運悪く坊主頭は椅子の上で居ねむりを仕て、白の當りを敷へそこねた。

主婦は無言で、氷すべりの様に板の間を、つゝと進んで、突如なり椅子の後から坊主頭を二ツ三ツ撲つた。球が打つかつた音よりも高く響いた。

坊主頭は首を縮めて泣出した。聲を立てると又撲られると知つて居るものだから、炭竈の蒸し泣きで居る。主婦は只さへ恐ろしい眼を一層恐ろ

しく輝かして睨んで居る。

客はいつもの事とて留めもせぬ『御免なさい、最う居眠りは致しません』などと子供の假聲を遣つて矢張遠慮なく球を突いて居る、黒が二點

三點とつづけた。

坊主頭は泣きながら『最う二ツで歸ります』と敷を取つた、が、其實は最う歸つて二ツに成る筈なのだ。客は眼を丸くして『そんな事は無い、最う歸つて居る筈だが』と一期の浮沈此時に有りといふ風で問ふた。

主婦は又五ツ六ツ續け様に坊主頭を撲つて撲つて撲付けた。はづみに坊主頭は椅子から轉げ落ちた、今度は聲を揚げて泣出した。主婦も高聲で

罵り始めた『手前は何んだ、此椅子は寢臺とは違ふよ。九歳にも成りやアがつて、ゲームが碌に取れねえやうぢやア、手前も餘ッ程ブローケン

球だねえ』と言ひながら、上草履を穿いた儘で、落ちてから未だ起きも

得せず板の間で擦剝いた肘の疵を撫でながら泣いて居る坊主頭を、蹴つ

た。

あまり見かねて客の中でも年上の一人が「おい〜おかみさん、此所は玉突き專業だせ。足球は止すがい、」と言つた。

「だつて貴郎、此位に仕て好い加減なんです。如何して〜強情さ加減は中々ですよ。恰似阿賤と好い一對です、妾の言ふ事なんざア聴きやア仕ませんからね……」

「阿賤さんは今夜は如何したね」と其年上の一人が尋ねた。これに連れて今まで夢中に成つて勝負を争ふて居た生紳運が「おう、本統に阿賤さんは如何したのだ、見えないぢやアないか」期う雷同すると、一號のゲーム取赤球の頬片がいよ〜真赤に成つて、阿賤さんは如何でも好いぢやアありませんか〇〇さん、最う三ゲームですよ」と叫んだ。

「阿賤と言やアまア何處へ消えて仕まやアがつたか、又死ぞこないの處へでも出掛けて行つたに違ひねえ」早く歸つて呉れば好いに、こんな間

抜な餓鬼にゲーム何んか取らせなくツても済むものをさ。ほんとに仕様が無い阿魔だよ」と風向きが違つて来た。

「死ぞこないの處だか、いき筋だか分りませんが、時を阿賤さんは居なくなりですよ。流行ッ子は違つたもんですぬ」と厭に針を持つた舌を廻はして居る。主婦は破れ障子に北風が吹込むやうにぶり〜と怒つて「困ッちまうなア、出るんなら朝の内早くか、夜も締めてからに仕て呉れば好いに」と怒鳴つて居る。

此所へ切つて箒めた様に其阿賤は歸つて来た。あまり新しくは無いが黒味の勝つた萬筋の糸織の袷に、横文字の唐繻子の丸帯を締めて、一樂の前掛をして、髪は銀杏がへしにして居る。小脇に小さな包を抱へて居る。入口の硝子戸を勢好く閉めて、上草履を突掛ながら、ぐん〜と、歩いて、ついで勝手へ這入つて仕まつた。

泣いて居た子供は大きに力を得たやうな顔をして涙を納めた。赤ら顔は

急に黙して、弾き棒で自分の鼻の先きを弄して居る。主婦はぶつ／＼言ひながら、テーブルの方へ退いた。わい／＼連は俄に色めいて來た。見得の話はこれから始まるのだ。

(四)

小包を勝手の方に置いて、再び此方へ出て來た阿賤は、さびしき一笑を傾けて、誰にといふ事はなく、言はゞ場内を壓しての挨拶を仕た。歸つて來たらさを囁付くらうと思つた主婦は、案外意久地が無くつて「阿賤や、困るぢやアないか、だんまりで出て行ツちまッては………お客様が皆御待ちかねだよ。お前と勝負を仕やうと仰有つて………」と歎願的小言だ。

「如何も濟みませんでしたね、一寸お袋の處まで行つて來たもんですからね」と平氣で阿賤は答へた。

「ほんとに阿賤さん待つて居たんだよ」とは、新形のスコッチ地で仕立てを氣にした、背廣を着て居る生白い紳士が、尖兵で砲火を發した。

「さうですか、では御詫にピンブールの御相手でも致しませうか」と阿賤は言つた。

「ブールよりは何んだ、僕は此間の敵が討ちたいのだ。如何も堂々たる男兒が女風情に四十貫つて、加之勝てずと有つては慨歎に堪へずだ」と呼ばつたのは、これを陸軍球の本家本元で、論功行賞に勳何等を得たといふ強の者。丁度第二號の臺が明いたので、手頃のキヌウを取るや疾く立向ふた。

阿賤は冷かに笑ふて「又負に入らッしやツたのですか、今度は御勝ちなさいよ」と言つて、同じくキヌウを取つた。粉袋でそれを二三遍拭ふて、第二號臺の傍に屹と立つた。恰も是岸上淵に臨んで山百合の咲けるが如き風情がある。

今止めた一組も、テーブル附近の人々も、皆どよめいて此方に眼をそぎ、此勝負如何、といふより、阿賤の舉動如何にと見詰めて居る。それは實に活潑だ、騒がずに、急らずに、阿賤はキユウを遣ふて居る。續けて十も二十も取る。阿賤が突く球には仕掛があつて、球の轉げるのは臺に鐵路が設けられて居るのでは無いかと思はしめる。距離を適當に選び爲めに、臺の周圍を絶えず廻はつて居るけれど、それは平然として少しも苦しむ風情が見えぬ。神女靈泉の端を廻つて、名玉を弄する趣きがある。

最う相手の陸軍は血眼に成つて、押したり、引いたり、乗出したり、後で突いたり、横から廻はしたり、頗る悶へて居る。それで如何にも當らぬ。いや他よりは決して拙いのでは無いが、阿賤はどには當らぬのである。

苦もなく最後のゲームを綺麗に取つて、阿賤は強の者を負かした。冷か

に笑ひながら『もつと修業して入らツしやい、それで無いと赤筋が殖えませんか』と言つた。陸軍は奮然として怒つたが、如何も仕方がない。これから入代り立代り阿賤に向ふたが、各阿賤にハンチーキャップを與へて置きながら勝ち得ぬ。

皆、例の事として、相變らずの殘念を口に出し、又翌日はとて大概去つた。残つたのは阿米利加から歸りたてと號して居る生紳士と、蠟燭町へ行き、ますと稱して居る生紳商との生と生とが揃つた。阿賤も少しは勞れたので、椅子に腰を掛けて休んで居る。櫻色に上氣を示して、何處を見るとも無しに彼の凜とした眼は、或一方を見詰めて居る。主婦は去つて、汽發洋燈の掃除を裏の方で仕て居る。坊主頭は舊幕時代の罪人が拷問でもされるかの様に椅子の上に正しく座つて居る。赤ら女は讀めもせぬ新聞を仔細らしく擴げて見て居る。内は俄に静かになつて、外を行來の車輪の音が響いて聞える折柄、更に入來る客二人。

(三五)

高峯露石は山方浮洲と共に此蹴月軒に入來つた。見ると忽ち新聞を投捨
 て出迎へたのは赤ら女だ「入らつしやいまし、好く入らつしやいました
 ね。今日は御連様と御一所で……さア此方へ御掛けなさい。臺も丁度
 明いて居ります」とお世辭たらしく。
 阿賤は僅かに掛けて居た椅子から離れて「入らつしやいまし」の一語を
 放つたばかりだ。
 生二人は此奴他の客が來たからには、好い方の一號の臺を遣はれては成
 らぬと思つたか、言合した様に立上つて「さア君と一勝負」と言ひつゝ、
 立向ふた。ゲーム取には阿賤が成つた。
 入代つて椅子に掛けた二人に向つて、赤ら女が連りに話し掛けたが、一
 向二人供に取合はないので、茶を差しに立去つた。坊主頭は主婦の居ら

ぬのを幸ひに、こくりくと又居眠りだ。

「彼ですか」と浮洲は問ふた「彼です」と露石は答へたが、それは極卑
 怯至極な小さな聲であつた「ふむ」と浮洲は考込んで仕まつた、一生懸
 命に見て居る。露石は益々小さな聲で「あれですもの、まさか私の妻に
 も出來んぢやアありませんか。それに御覽なさい、彼の紳士連のキザ加
 減、實に堪らないではありませんか。我等癖のある人間から見ると、實
 に厭でく成らないぢやアありませんか。人間腐敗して居る標本を求め
 やうと御思ひなすつたら、先づ彼の人々を御選みなさい。それ、あんな
 厭な男も、亦我々をも、同様に彼女があつかひますせ。いや我々よりも
 寧ろ重きを置いて居ますせ、彼の男が何かいふと笑ひますせ、彼の男が打
 信切を粧ふて話掛けると、それを眞實と思ふて喜びますせ。彼の男が打
 解ければ、又彼の女も打解けませう。それにだ、私が餘所ながら何か言
 つても、ちつとも合點きません。如何な無情の女でも、男が眞情燃ゆる

ばかりの愛を投じたなら、幾分か彼の心も暖かになるのが當前ではあり
 ませんか。それが彼の女は益々冷かな灰に成つて仕まひます。なに、格
 別私に口へ出して言つた譯ではありません。唯這んな處へ奉公して居て
 は、碌な者には成れないから止せといふ事と、彼の境遇の不幸多きに同
 情の涙を濺いだに過ぎないですが、彼の女は少しも是に感動仕ない。詩
 人の熱血は俗人の浮氣に勝てないのです。何もそんな女に關して、彼の
 女自からがそれ程に感じて居ない自分の境遇を他人の私が獨で心配して
 遣るの要もありませんが、其所が如何も捨ておかれなのです。彼の女
 を妻と仕やうとは勿論思はないですが、同胞とも、友達とも仕て、永く
 交際したいのが私の望みなので、それを私はそれとなく説いたです。此
 所だ、詩人と俗人との衝突は。如何です、そんな事を説く私の眞情とい
 ふ物は詩人の方から言へば實に熱情の見ゆる處で、貴ぶべきではありま
 せんか』俗物は吃驚して可笑な事をいふ人だと變な感情で迎へます』

『思くすると氣違ひじみてるよ、などと言はれる奴です。彼の女は私を
 變な事をいふ男の側に置いて居るでせう。情けないではありませんか。
 此所で非戀愛批評家は論じませう、何んだ、一婦人の爲めに、一賤婦の
 爲めに堂々たる男兒が斯くまで、心を苦しましめるかど。けれども、愛
 の泉が涸れて居る人間は、恐らく人間ではありますまい。愛を大きく歌
 へといふ人もありませんが、大は廣い代りに淺い、小は狭いかわりに深
 い、大を取るも好し、小を取るも好し、我は小なれども深からん事を欲
 する戀愛小説家ですもの、此位な事は何んでもありません。當前です』
 『分りましたよ、たしかに分りました。御望み通り盡きませうよ』是非
 書いて被下い、私は非常に愛し戀し貴く思ふて居る本尊の玉突場の備
 女をして居て、夜叉の如き主人の下に遣はれ、餓鬼の如き友と一所に居
 り、彼れあの獄鬼供の火の車を持つて来て、それに載せやうとしてそ
 のかして、居のをも知らずに、菩薩が救世の船を出してもそれに乗らう

ともせず居るのを、最う見るに及、ばないで済む。無垢清浄なる乙女を常に座右に置いて愛する事が出来るのですから、如何か願ひます、貴郎が筆の先きで産んだ娘を、私は娶ります。如何か願ひます、是非願ひます』と、思はず聲の高くなりかけるを押へて、露石が語るを、浮洲は聴きながら鉛筆を出して、スケッチブックへ何かを寫して居る。

(六)

露石が急つて、早くくと催促に度々攻めかけた間に、ゆつくりと構へて三月の餘を費し、浮洲が精神を込めて書いた乙女若菜摘の圖は、漸く露石の床の間の正面に持運ばれた。玄關の二疊敷を敷へて僅か三間の借屋住居には、勿論此額を掛けるべき個處の無いのは言ふを待たぬ。初めて、それを、床の間に置いた夜は、實に嬉しくて嬉しくて溜らな。露石が距離を計つて、光線のあんばいを考へて、右から見つ、左か

ら見つ、或は近寄つて、或は遠く離れて、様々にして見た。

畫として見たのではない、妻として見たのだ、そして心の内に語るらく。吾妻よ、これから如何か我を慰めて呉れよ。笑はざるも好し、憂へざるも可なり。其紅梅の蕾の如き唇を開いて語らざるも好し。其愛の露を含んだる眼も我を見ざるも可なり。其籠を抱きたる儘若菜摘みにと歩き出でざるも亦悪しからず。寸分違はぬ顔形の女があつて、笑ひもする、憂ひもする、加之其聲あつて能く語り、其眼我を見るに明かだ。けれど、それは我にばかりではない、誰にもだ。況んや其心の底に如何なる悪魔の潜み居るか、分らぬ譯だ。其女は言ふまでもなし、如何な高尚なる處女があらはれやうとも、御身の如く清らかなるは無い。それが我所有と成つたる嬉しさは如何ばかりぞや。堪らぬ、嬉しくて堪らぬ。一日新聞社に出勤して、機械場の瓦斯の洩れて侵ひ来る編輯局の塵に染まつた頭腦も、これよりは歸來忽ちに一掃されるであらう。恰も御歸り

あそばせと言ひ顔に、床の間にちやんとして居るであらう。我も此時、今歸つたよの語を放つかも知れない。又其の著作に夜を更かして、一人硯を摩す冬の寒さも、我と共に眠らむ御身が傍にあると思へば、何んの事もない。夏の暑さも、如何で恐るべき。春の花、秋の紅葉、見に行かざるも何かわらむ。富貴望む處にあらす、名譽好む處にあらす。如何で入れられぬ不遇詩人、社會と異なる人、社會と異なるの快樂を取るを得せしめる御身は、妻ならぬ神、神が化身の妻なるぞや。

斯くて露石は其油畫に對せる儘夜を更かした。米飲爨の老婆は譯も知らず、臺所の方で、雑巾を刺しながらの獨言「大層あの繪がお氣に召したと見える」

やがて露石眠るの時、寐床の枕邊へ洋燈と共に油畫を持つて來た。いつもは讀書、今宵はこれを眺めて餘念は無い、恰も子供が紙鳶を貰ふた嬉しさに、枕下へ持つて來て眺めるのと同じである。鶏鳴を聽いて吃驚し

たが、殘念さうに燈火を消した。けれども未だ眼底に印された油畫は暗黒の中に見える。好く明かに見える後には、油畫の乙女と玉突場の阿賤どが混合して見える。嗚呼彼の阿賤が充分に我が愛を理解して、我に又充分の愛を注いでさへ呉れば、そして此畫の乙女の如く清らかであつたならばと、横道へ思を走らしかけた露石。不圖氣が着いて、これでは成らぬと我と我を叱し、燈火を摩つて更に洋燈に點すれば、枕下の乙女は矢張籠を抱いて、繡枝に掛つて藻掻いて居る小鳥を一心に見詰めて居る。

後編

(一一)

岩石峩々たる間で、鶯が啼くどの評判。これは東都新聞社の編輯局の電話に、美しい女の聲が度々掛つて來るので、それを言つた某記者のうが

ちである。

何者だか知れないが、或日の一時頃、一の面を締切つたばかりの時に、電話が掛つた。それは十七八の美しい可愛らしい聲で『もし〜御社の編輯局に高峰露石とおつしやる御方はおいで、すか』と問ふた。取次ぎの給使は、これを露石に通じた。何心なく露石は音聴器を當て『はいはい、私は高峰露石ですが、貴君は何方』と問ふた『貴君が本統に高峰さんですか』と念を押した『はい左様です、貴郎は』と聴きかけた時に『一寸御待ち被下い』と向ふから言つた。又今度『本統に貴君は露石様ですか』と同じ事を念を押した、が、其聲は前の美しい可愛らしい聲に優しさを加へた聲で、たしかに相手違ふたらしい『はい、左様……貴女は……』

『妾はねえ、貴郎の御存じの無い者で御座います。それがねえ、貴郎を電話で御呼び申しましたのはねえ、甚だ失禮で御座いますがねえ、電話

で御座いませんと尙失禮で御座いますから、それで掛けましたので御座います。素より名も包み、御目にもかからず、斯うやつて電話で御話を致しまするのは、思ふ儘の事を御打明け申す事が出来ませんからで御座います。ですから、決して妾の身分や名前を聴かうとなさらない様に願ひます。そして、はしたないと御さげすみなさらない様に願ひます。』はア、左様ですか、其御話を承はりませう『其御話し申しますのはねえ……』と少しく口籠つた。電話でも扱て言出し悪いと見える。が、漸く勇氣を絞出してといふ調子で『妾は東都新聞を愛讀致して居りますがねえ、別して貴君のねえ、小説をねえ、愛讀致して居りますのでねえ』と、大分ねえの韻が重なつて來た。

日に幾枚と限りなく、便毎に來る讀者よりの葉書には、有り得る限りの悪口雑言を並べて、廻りくどいでれどした人情小説は止めて、勇壯活潑なる時代小説を出せよと、我を罵らぬは無い、殆ど我を罵倒し盡

して居る。社の會計などでも、賣捌の方に人氣が無いから、如何か變化の多い頗る面白い小説を、どの注巻もある。批評家も亦多く我が戀愛小説を非難する。百千萬の敵の中に、吾小説を愛讀するとは、如何に貴ぶべき人よ、と露石は喜んだ。

「それは實に難有う御座います」と答へた時には、露石の顔は熱して真赤である。

「妾は貴郎を眞の文學者として尊敬致して居ります。ですからね、如何か御交際が願ひたいのです。前にも申しました通り、名前は仔細あつて申されませんが、電話の上で御交際が願ひたいので御座います。如何か思ふた儘を何んでも打明けて御話し申しますからねえ、御轉婆だとお笑ひなく、御交際被下いませんか」「それは此方の願ふ處です」「早速御承諾被下いまして、寔に難有う御座います。これからは度々御掛け申しますから、御迷惑でも如何か御話し被下いませし。妾はそれを無上の樂し

みに致しますから」と未だ話しかけて居る途中、交換局であまり長い爲めに線を切つて仕まつた。鶴に乗つて月宮に向はんとする半ばにして下界に落ちた感がある。

此後午後の一時頃に成ると屹度露石に電話が掛つて來るので、果ては取次ぎの給使が口が脆く、優しき女の聲でこれ〜と素葉抜いた爲めに、悉く露顯に及んで、編輯局を轉覆せしめる程の大騒動、艶福羨むべし、とか、今夜は何處かで騒り給へど、か、四方八方より突付かれる。けれども露石は眞面目で辨解して、何者か知れざる事と、談は多く文學に關する事とを言ふても、一同信用せぬ。岩石巖々たる間に鶯が啼くとの大評判、午後一時に成ると、取次ぎの給使を待たないで、記者がかはり〜出掛ける。併し露石を呼ぶ最初の聲は、いつも他の女で、露石の聲を聴分けて、いよ〜當人が出たと信せねば本尊の優しい聲は話さない。片耳借りて露石と對話中に聴くを得た某記者は、頗る其聲の美し

く愛らしく優しく、加之言葉の調子の高尚なるに現をぬかして、必らず是容色の美ならむと推測し、又身分は賤しからざる人と判断して、それと同時に露石と其令嬢との間柄は、決して怪しいのでは無いといふ事をたしかめた。

衆説は露石に勸めて、電話が切れるや否や交換局へ何處から掛つたかを尋ねよとの事であるが、露石は其令嬢との約を履んで、それには従はなかつた。

(一一一)

出ては耳に優しい電話の聲、内に在りては眼に美しき油畫の乙女、これを聞きこれを見る露石の樂しさは今日まで未だ曾て味はなかつた處だ。掛ける電話の主の素性、それが知りたくなるのは常の情だ。畫の乙女に魂あれと望むのも亦常の情だ。けれども、此常の情から、飛離れて居る

露石、あきらめて居る、満足して居る、厭世の極の樂天に、不平の極の満足に、居つて以てあきらめて居る。露石は電話の聲を人わざとは思ふて居らぬ。これは詩人を慰める天與の音樂と聽いて居る。そして其油畫の乙女に對しては妻の情を以て遇し、其電話の令嬢に對しては友の感を以て交はつて居た。

さるにても、其令嬢は、能くも文學上の議論を解し得る事よ。加之世に埋木の我が眞價を解し得たる事よと、露石は敬服の念を高めて居る。

其令嬢は露石が不遇の源を知つて居る。世の批評家が露石を論じて、彼は天地の死景を寫すに長じたれども、活世界の活人物を描くに不得意であるといふた事を危ぶんで居る事も、彼の令嬢は知つて居る。現在の醜を描寫して、理想の鉤を掛ける黒木を、無遠慮に投出したのを以て、紙上に活人物が躍動して居ると評するの不可なる事をも、令嬢は知つて居る。社會はたしかに醜なる物、それを珍らしさうに、今始めて氣が着

いたやうに、騒出して、描寫する事の幼稚であるといふ事も、令嬢は知つて居る。露石は理想を以て醜を美に悪を善に悉く焼直すか、あらずんば、それに近寄せるか、仕て居る爲めに、現世界の現人物は少しもあらはれて居ないといふ事も知つて居る。さればとて、露石は、理想に傾いて、尤で實際を離れるの不自然は爲さぬ事をも知つて居る。これ程露石を知盡して居る人が、世の中にあらうか。今の女の中にかゝる知己があらうとは實に意外で、理想の戀が高い爲めに現在の女を罵倒して居た露石も、少しく説を動かさねば成らぬ。

かゝる人に對しては尊敬の念より他には無い。我伯牙たらずとも、貴女は誠に鍾子期であるとは、常に電話で露石の謝する處だ。

例の如く電話は掛つた。此日は不幸にして新聞紙は發行停止に成つた日で、編輯局には誰も居らぬ、皆朝の内歸つて仕まつた。露石は電話が待れるので歸らずに居たのだ。

最初は他の新出版物の評判であつたが、不意と令嬢は言出した『文學者と財産家とは伴はないもので御座いますねえ。小説家で非常な金持な方は無いやうですが、文學がハンの爲めに追はれるやうでは、迎も結構な作は出来ませんねえ』『全く然うです、けれどもハンの爲めに追はれるので、初めて文學の研究が出来る事もありません』『妾がねえ、考へますにはね、文學者は想を練り筆を執る一方に力を盡しましてね、他の事には成るべく關係仕ないやうに、又財産家は其文學者を保護する爲めに、絶えず資本を出すやうに致しまして、それで兩方相待つて詩といふ物に忠義を盡しましたら、嗚呼い物が出来ませうと思ひます』『それがですな、其保護を受けると同時に腐敗して仕まふのが有りますからね、これも考へものです』『けれども亦腐敗せずに發達する方も御座いませう』『それは無い事もありません』『貴郎は如何です、もし此所に貴郎を保護して、米鹽の事に御心配おさせ申さないやうに致しまして、そして充分に

詩を御作らし申すといふ者が出ましたら……』『腐敗は致しません、益々詩道の爲めに奮發致します』『それならば、本統に今貴郎を御世話を申したいといふ者があらはれましたら、貴郎は御承諾被下いますかえ』と少しく言葉が改まつて来た。

『それは御免被蒙ります、理論は理論、實際は實際です。私は其保護を受けるといふ事が大嫌ひです。元來頭を下げるといふ事や、手足を縛られるといふやうな事が大嫌ひなのです。石地藏の上に木の葉が乗つて居ても、そりが氣に成つて溜らぬ性分です。木像の手に蜘蛛が巢を掛けて居ても、それが心に響いて成らない性分です。況んや他人から自分の頭を押へられたり手足を束縛されたりするのが、私の性として堪へ得られないのです、保護——如何に寛大であらうとも、語を替へて云へば、それは束縛するのです。私は今新聞社から束縛されて居ます。社會から束縛されて居ます。非常に苦痛を感じて居るのです。私が思ふ存分の運動

をゆるされぬのです。おのれの奉じて居る詩論は發表する事が出来ぬのです。御覽なさい、今に破裂致します。それは私でも、文學者は三様に働かねば成らぬといふ事位は知つて居ます。文學自からの爲めに、國家の爲めに、又パンの爲めに……詩人だからといふて矢張國民です、國が亡びるのも自然の勢ひだといふて見て居る譯には參りません。詩人だからといふて生きて居ます、雲を喰ひ霞を吸ふて命が繋げるものでもありません。矢張三度の食は致さねばなりません。田で稲ばかり作つて居る譯には行きません、麥も作らねばならず、野菜も作らねば成りません、鋤を持って大根を堀るばかりが農夫の任務では有りません。下肥も掛けねばならず、雑草も取らねば成りません……斯う知つて居ます、知つて居て、それで私には食の爲めの素人受けの小説が如何も書けないのです、食の爲めに本屋の主人や新聞社の社長に頭を下げる事が出来ないのです。今に破裂します、最う度々衝突して居ますから……私が境遇は慘澹

たるものです。世に逆ふて生れた響きは、飽まで世に逆ふて傳はります。世に逆ふて居る結果として、今に私は非常な境遇に墮りませう。けれどもそれは覺悟の前です……私を保護すると仰有る方がありましたら、諒します、其厚情は深く謝します。けれども、私の癖として、御危介に成る事が出来ないのです。それよりはです、高峯露石といふ男があつて、詩に忠であつた、如何にも熱心であつた、といふ事を御記憶なすつてさへ居て被下れば、最うそれで好いので御座います。百千千萬の攻撃者の中に唯一人我に優しき貴女よ、涙の出る程私は嬉しいです』とあまりに熱して語つたのと長時間電話に向ふて居たので、露石は目が眩んで來た。其所へ倒れんとして危く踏留つた時に、何やら向ふから言つたやうであつたが、それは聴取れなかつた。

(三三)

一月の後、終に電話の聲を聴く事が出来なくなつた。それは露石が新聞社を止したからだ。露石に両親があるか、同胞があるか、それとも亦妻か子といふやうな系累があつたなら、這んな無分別も仕なかつたらうに、油畫の妻はそれを弱めるの力が全くなかつた。常に畫家浮洲は忠告して、貴郎は求めて不遇の地位に行く、あまり物事を嚴格に解釋するから悪い、滑稽といふ事も世の中にあるといふ事を考へなければ成らない、と説いても、それは知つて居る、無論求めて不遇の地位に立つ、それは立つ譯だ、ゆゑに決してそれを怨みはせぬ、不平は鳴らさぬ、が、寧ろ自分が不遇だけそれだけ未だ社會が低いのだなと思つて憫れむのである。考へて御覽なさい、知らねば格別、知つて高野の玉川の水が飲れませうか。醒めてから同じやうに醉漢と巫山戯られませうか、と打返して仕まふ。

新聞社を退いて後は、米飯爨の婆さまも高峯の家を退いて仕まつた。一

人で生活を二月ばかり續けて、さびしき庭前の秋を眺めたが、浮世の風潮、不完全なる現影を随分見て見抜いて居るにも關らず、頑として寫眞に響かせる人生の説明、人間の運命、性質と境遇、其變動等を描く事を爲さず、相變らず理想に訴へて、情と情と合して出る火花を捕へ、天然の景中に自然の人を浮べ、或は前後切捨てたる中味の美點をのみ攫んで書くので、單純だとか、人物がいつも同じだとか、觀察が鈍いとか、何とかと冷評されて、本屋は出版を見合せ、讀者は更に買はふともせぬ。迎も露石には東京の生活が出来なくなつた。借家住居を引拂つて如何かせねばならぬ。相の日陰谷の温泉場に乳母であつたお澄といふ老女が居る。これは露石には母親も同然で、まことに好く可愛がつて呉れたので、此暖かい情は決して今に忘れないのである。お澄は東京を去つて故郷の日陰谷に歸つてから間もなく、たよる娘も死んで仕まつて、後には唯一人、世を淋しく温泉場を廻はる餅賣りに成つて如何やら斯うやら暮して

居るとの事、さぞ年が寄つて居るではあらうが、猶我を抱くの乳母として、我は抱かれるの乳兒として、彼の懐に世を隠れたら、安らげく殘命を消されるであらうと考へた。此乳母に頭を下げ、手足を縛られるのは、少しも耻辱ではないと考へた。最う／＼つまらないつまらない如何に急つても望む通りの戀が得られるではなし、いつまで待つても自分の作が世に容れられて歓迎せられるではなし、つまらない／＼何を苦しんで此東京にまごついて居やうぞと考へた。失意の露石は、畫家浮洲を訪ねて、いよ／＼山中に隠れて仕まふ事を言つた。例の性急、留めて留まらぬ事を浮洲は知つて居るから、名殘こそ惜しめ、他に慰めべき言葉はなかつた。家の雜具を買拂つて日陰谷までの旅費はある。今日までに、新聞や雜誌に載せられた文字を、一々切抜いて、叮嚀に張つてある帳面十四五冊と、一冊に纏まつた古形の小説三巻と、未だ草稿の儘なるを五六冊と、其他

書きかけの反古一包を浮洲に預けて、如何か頼む、我より他に我文字を保存する者は無いのだから、よろしく頼むと引渡して、それでも彼の油書は額端をばづして、中のカウンパスだけを新聞紙に包んで、又上を布呂敷で包んで、大事に持つて居る。何處までも伴ふつもりであらう。「おはれなる露石と聊か別離の盃を擧げる爲めに、浮洲は神樂坂下の牛肉屋へ行つた。

自からを信ずる事の高く大に厚き詩人と、自からも何も捨て何の用があつて人は生活爲すにやの問題などは決して起さない畫家とは、アルコール澤山の酒を酌交して牛鍋をつゝき合ふた。

澤陽江の秋の暮、尙それよりも一層の慘を以て別れんとするに望み、浮洲は言ふた「貴郎が社會から彈き出されたのは、決して無理ではありません、けれども餘りに先さへ案内者が進むと、旅人は附いて行く事が出来ませんよ」

(四)

浮洲に別れて、とぼくと牛込見附に掛つた露石は、俄かに肌の寒さを覺えた。土手の松ケ枝に木枯の聲あつて、停車場寂たり、たゞ瓦斯燈のみが淋しく點されて居る。

我知らず露石は土手に上つて、くねりたる松の根に腰を掛けて「ア、」と思はず歎息して「東京人士は、今不遇の詩人が去つて田舎へ行かうとするのを知らないか。世間は今夜の如く眞暗である。人々は最早や眠らんとするのか、我が東京を去るのは、則ち文壇を退くのである。此一小説人を東京に入れる事が出来ないのか。それにしても彼の浮洲君は、零落の極なる此露石を見捨てないで、能く突合つて呉れ給ふた。安全なれかし、山方一家の安全なれかし、扱て又彼の電話の令嬢は、何處の人であつたらうか。彼も幻の如く消えて昔の名残である」と獨語をなし、は

らしくと熱き涙を濺いだる露石。少時は沈んで見えた。泣くは露石のみならず、暗き土手を泣きながら傳ふて此方へ来る者があ

る。近寄るに、見れば、彼の玉突場の坊主頭の小僧であつた。

「おい、如何したのだ」と露石が問ふに時に、坊主頭は人ありと初めて気が着いたやうだが、其人が露石と知れても、何故今頃此所に此人がと怪しむでもない。しやくり上げるのを押へながら、ちつと露石の前に立つて居たが、此人、否、誰に限らず、これを人に相談しても駄目だといふ風で、又泣きながら歩き出した。

これも亦我と同じ逆境の子、我と共に私の悲しきを泣くやうに思はれてならぬ露石。突如呼び留めた「おい、如何したのだ、何を泣いて居るのだ」けれども歩くのは留つたが泣くのは止めぬ。そして未だ語らぬ。闇ながら露石が其坊主頭の提げて居る物をすかして見れば、土瓶の破れ

て蔓に屬する部分のみが残つて居るのを、大事に持つて居る。

「破つたのか、それを」

「買ひに行つて破つちまつた。歸ると呵られる」と又泣いて居る。

「何も泣く事はない、これで又買つて来るが、」と言ひながら、露石は汽車を降りてからの鐵道馬車賃に宛てある旅費の二十錢を裂いて遣つた。子供は泣き止んだ、そして禮も言はずに、すたこりやと行きかけた。

「おい、あの阿賤さんは如何して居るね。歸つたら僕は最う東京に居ないとやつて呉れ」と露石は言つた。坊主頭は直ぐ答へた「お賤さんは此頃居ないの。お袋が病氣なもんだから……我らを可愛がつて呉れるものがなくなつたので困つちまう」

日陰谷の冬、全く日陰谷で、山の頂さのみが日光を受けるばかりだ。山の根の清水が氷つて、岩に喰込むので、時々土が大崩れに崩れる。急流は氷らないが、其中にある岩と石とは密着して、水晶の様に見える。寛の洩れる邊は、悉く氷柱の奇觀があつても、珍らしくも無いが、子供も取らぬ。湯宿は多く戸を締めて休業同様。これが春夏秋の三季は東京にも見ぬ繁華をするかとは誰が思はふ。

按摩、旅藝者、床屋、縁起賣、餅賣、此冬の期は皆寝て暮らすのである。總湯の湯の烟のみが賑ふて見える。

昔の乳母を尋ねて此日陰谷に來た露石は、同じ冬籠の群に入つた。瘠衰へたる露石を見て、おのれの年の寄りたるには氣の着かぬお澄、涙をこぼして、まアこれが彼の人形の様に可愛らしかつた坊ッ様とは誰が思はふ。この驚れなされた事は。實に如何も悲しくてならない。此方へ來たからにはゆッくりと湯治をして、元の躰になつておいでなされ。こ

れも全く病身のゑだから、と信切極まりない事だ。

遠くの道を歩きつゝ、けて其目的の地に達した時の如く、安心して、氣が緩んだか、がツかりとした露石は、益々衰へた。これをも病身の所爲としてお澄婆アさんは勞はる。丸で子供あしらひにして介抱して呉れる。

露石は全く二三日は死せる者の様であつた。

總湯に入つて出ては行火に藻潜り、此家にもふさはしからぬ油畫を眺めては、寝たり、起きたり、お澄と昔語を仕たり、近所の人々とも懇意になつて話に來たり行つたりもする。何か一日勞を勞して書いたものを、お澄婆アさんに讀んで聽かせる。婆アさんは少しも分らない、けれども、ふむ、ふむ、と喜んで聽いて居る。斯くの如くして冬を過した。名もなき水、名もなき山、花咲き、鳥鳴き、ほこくと木樵さへ斧を枕に居眠るべき春景色、これを我物にして露石日毎に出掛け、さも楽しく暮して居る。東京横濱などからも、そろそろ湯治に客が來る。餅を賣る

時ど成つたのでお澄は忙がし。

露石は目白鳥を一羽養ふて、それを囚鳥にして、鞆枝を張り、小鳥を捕るのを樂しひやうに成つた。捕れた鳥は又逃がして遣るのだ。

紫雲の瀧へ行く途中の丸木橋を渡つて突當りに、石地藏が立つて居る。其所に雑木が澤山繁つて居る。露石は此所へ小鳥の籠と鞆枝とを仕掛け、そして遠巻に其邊をさまようて居た。

折柄瀧見物の一連、驪山樓といふ湯宿の女中が案内して、此方へ来る。

それは東京の某の新華族の令夫人とやら、未だ若い十八九、二十には成るまい、頗る美人で、髪は束髪ながら扮装は如何にも高尚であつた。其

他従ふは侍女らしい老若の三人と、案内に立つた宿の女中は二人。其一人と露石と顔を見合せた時には、實に互ひに驚いた、それは阿賤だ、如何して此處へ。

* * * * *

驪山樓の庭を限つて流れる小川は、十三夜の春の月にきらめいて、金色の魚の躍るやど疑はしめる。客間々々の燈火は爲めに光の薄いやうに思はれる。櫻の花弁の散るは、大方に此小川に落ちる。

此小川を隔て、男女の二人、話は今中途まで進んで居る。庭の櫻に身を寄せて、倒れつべきを危く支へて居るのは女で、岸の岩に腰を掛け、動くべしとも見えぬのは男だ。

「何故妾はあんなで仕たらう、如何して貴郎に御馴染申さなかつたでせうか、ほんとに我身で我身が分らないのですよ。ですけれども、そんなら此頃は彼の時から見ると碎けて来て、人様にやさしいかといふと、矢張りなのですよ。相變らずけんどんなのですよ。それに唯只貴郎の御優

しかつた事を、今に成つて思當つて、本統に勿躰ない、と思ふのです。それは余くの處が、いろく彼の玉突で御親切に仰有つて被下いましたッけが、例の御客の口前と、さらに来て小當りに御當りなさる御仲間の

中へ入れて、一向御取合ひ申さなかつたのは、ほんとに妾が馬鹿なんですよ。如何かかんにんして被下いませ。妾は殿方といふと皆ぞの方も口前ばかり好くつて、そして眞身に見せかけて、全くは薄情なものだとはかり思込んで居たもんですから……それが、母が亡くなりまして、ほんの一人ぼっちに成りまして、此温泉場へ稼ぎに来て見れば、だんくんと世の中が心細くなつて、蹴月軒に居た時のやうな男まさりの根性も角が折れまして、弱い本音を吹くやうに成りかけた矢先、斯う申しては失禮ですが、彼の時分から見ると大層御やつれなすつた貴郎を御見かけ申し、それから人の噂に聴けば……妾に似て居る油書を……妾のやうな者に肖て居るから、それで其油書を大事になさるのでは有りますまいか……其油書の女に似て居ます妾より他の女に何なすつて入らつしやつたとか、これも人の噂ですが、それ程までに實のおあんなさる御方とも知らずに、齒の浮くやうな玉突の御客仲間に貴郎を御入れ申して居ましたの

は、如何考へて見ましても妾が馬鹿。是非御目に掛つて御詫を致しませうと、最う始終心掛けて居ましたが、丁度好い都合で此所で御目に掛り、これで願ひは叶つたやうなもの……如何も貴郎も御氣が急いでは御座いませんか、それならそれと彼の時に……」と言ひさして、聲は絶へた。櫻の枝はふるくと震へて、花は雪の如く落下する。石の如き人は口を開いた「少しくお前は誤解して居る。それは我が氣が急く、あきらめ様か速かだ、と思ふのも無理ではないが、氣の急いのは持前、そればかりでは無い、他に考慮もあつたからだ。が、今それを細かには迎も説かれぬ。唯只彼の時の我が眞心を今に成つてお前が解して呉れたのが嬉しい。彼の時分つて呉れたら尚嬉しいかつたらうに……それは詩人は俗人から見たら何んでも無い事に同情を表するから、普通の考へから見ると可笑な奴だ、不思議な人だ、と思つたでもあらう、お前も然う考へたのも決して間違ふては居らぬ。最う好いそれで分つた」と

言捨て岩を離れた。氷柱の解けた岩角に鳶の細れし風情がある。

「わ、もし、ちよいと御待ちなさい、ちよいと待つて被下し」「何んだ」

「此宿と貴郎のおいでの家とは近所でも御座いますし、これから暇さへ

あれば伺ひますが、よう御座いますか……」と思切つて女は言つた。

男は甚だ迷惑な様子で「如何かそれだけは御免だ」と女に取つては意外

の言葉「これまでの妾の仕内を御立腹は御尤もですが、せめては此後御

傍に居て、及ばずながら御世話が……」とは男に取つての意外の言葉。

益々以て迷惑で「いや如何かそれは御免を願ひたい、私の情は涸れて仕

まつた。最う大きな感動を興へて被下るな。嵐に堪へぬ荒屋だ、そらッ

と此儘にして置いて……」と言放つて岩道を早や歩み去る後影、月は表

をのみ照らして、え、とれつたい、飛ぶには少し間の廣い小川。思切つ

て飛んで見やうか、もつと深かつたら身を投げて死んで見やうか、ちら

して見せるは男の手か。彼の方に限つて其手は無い筈。此方の氣性を引

いて見る氣か。向ふから來れば身を交して避け、先方が逃げれば追ふて

見たいつむじ曲り。毎日々々押掛けて行つて魂負けさしてとゲームを争

ふ昔の失せず。彼の臺をめぐる時の活潑を今も見せて石燈籠の後を過ぎ

て去つた。

此跡は、女の倚つて居た櫻のみか、男の掛けて居た岩のみか、中を流る

小川のみか、月は照らし出したる女の影、垣を廻つてあらはれた。雲

雲の瀧見にと行きたる華族の奥方は此人であつた。

(六六)

電話の聲は聴き知り給ふとも、妾が筆のはこびを見給ふは今を初め
てに御わすならむ。今はすべて打明けて、おもてだちて、語りたさ
のあまり、失禮を願みず一筆しめしめし。

今も石地蔵の頭に塵を載する事を嫌ひたまふなるべし。其御氣性す

べて能く存じ居り候へば、これは、とて、別に中上げず候得共、御前様を此儘に埋め終り候事の口惜しきは、一通のべたく存じ候。御前様を安らげ置き候乳母の、今一人此世の中にありて、是非に此方へ移り給へと乞ひたると思ひ給へ。斯くて其第二の乳母は、一として御意にさからはす、況んや御身を束縛するなんど、ゆめあらぬべしと思ひ給へ。斯くて御前様が意に随ふに委せて詩作あらむ事を心永く待つあらば、如何に仕給ふ。妾は去藏の冬、某家に嫁ぎ申し候。良人なる人も聊か文學の何物たるは解し候。御前様の技倆をも能く存じ居り候。其第二の乳母が家は、妾が良人の邸内にて、林の中に田園あり、其中の離れ家、前に小川も御座候。静かにして、世を遠く、仙境に近く御座候。あはれ、妾、否、乳母が乞を容れて、日陰谷を出で給ひ、詩の光を再び見せ給はずや。

神垣君子

高峯露石様

御許へ

驚かされて、露石は茫然の上の茫然であつた。斯くまでに我を構ふて呉れる人があるかと喜んだが、同時に斯くまでも我を苦しましむるかと思ひしんだ。知己一人もなかつせば寧ろ我は安樂なるものを、一人の知己を得れば、其一人の知己に報せんとして勉めざるを得ざるの性、今はそれに堪へられぬ。乳母の家に眠るより他には何も出来ぬ、と露石は悟つて居る。頭腦は單純に成つて、複雑なる東京に入らふといふ事は好しや如何なる静閑なる地位たりとも厭なのだ。日陰谷を無二の隠れ家、閑古鳥の棲處と定めて居る此時、前には阿賤に驚かされ、後には君子に驚かされ、此所には居る事が出来ぬか、去つて行く先、恐らくは其所も安らげくはあるまい。我身の行く處、何の地たるを問はず、悉く皆静寂ではあ